
ぼくらのなつやすみ

兎羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくらのなつやすみ

【Nコード】

N7989G

【作者名】

兎羽

【あらすじ】

君と出会った夏…。ぼくは初めて恋を知った。

第1話（前書き）

B Lです。苦手な方、興味ない方は興味本位で読まないで下さい。

第1話

親の離婚なんて、今時珍しくも何ともない。

それなのに、母さんはなぜ逃げるように…隠れるようなマネをして
此处に帰ってきたんだろうか……。――。

ガタガタと車体を揺らしながら、舗装さえ施されていない山道をその車は行く。本当に道路かさえも疑わしいその道はところどころに穴をつくり、タイヤがそこを走るたびに後部席に詰め込んだ大きめの荷物がその振動で倒れそうになった。しかしそれが倒れる事はなく、なぜなら後部席に座っている一人の少年がその荷物を支えたからだった。

気怠そうにその荷物を支えているのは彼の右足で、その視線は先ほどもうずっと窓の外へと向けられていた。草が茂った何も無いそんな光景を彼は飽きもせず、ずっと眺めている。否、飽きてはいるのだろう。だが、この車内の殺伐とした光景を見るよりは外の草木でも眺めていた方がいいと、そんな消去法な考えだった。彼の口から漏れるのは言葉ではなく重苦しいため息ばかり。もうかれこれ、車に乗り込んでから三時間弱という時間が経つのだが、彼は車に乗り込んでから一度も声を発していなかった。

今運転席に座っている彼の母親と彼が不仲という訳ではないのだが、状況が状況だけにこの気まずい空気の中どちらも会話をしようとはしなかった。

つい先日、彼、如月智也の両親が離婚した。

親権は母親のサキとなり、母は世間の目を気にしてか今こうやって遠く離れた田舎へとやってきていた。一年に一度、来るか来ないかのそんな田舎。彼女にとっては住み慣れた故郷なのだが、彼にとっ

ては慣れない土地のほかにはない。たまに来るならば、新鮮でそれなりに楽しめるが実際そこに住むということになれば話は別だ。あんな…畑と森と川しかない場所まっぴらごめんだと、トモヤはうんざりとした面持ちでまた深いため息をついた。

田舎に移り住むと聞いてから、トモヤはずっと不機嫌だった。不機嫌というよりは憂鬱さを隠せない感じだった。なにを後ろめたいのか、サキはトモヤが生まれ育った地元にはいたくなかったらしく、学校の夏休みが始まるとともに、大荷物抱え、今こうして山道を走り祖母の家へと向かっていた。おかげでトモヤは友人達と遊ぶ予定を立てる事もなく、誰に何を報告する暇もなく車に乗り込み今尚退屈な時間を過ごしていた。

そろそろ本格的に道なのかどうかも分からない路を走る車に、茂った草が当たる。隠れ家のような、そんな場所に彼の祖母の家があった。

「ついたわよ」

久々に聞いた気がする母の声がいつもよりも若干低く感じるのは、この重苦しい空気故のものなのか。母は早々に車のエンジンを切り、扉を開け、車から降りる。そんな母親に続いてトモヤもようやくその狭い車内から抜け出した。長時間、車に乗っていたせいで体はすっかり固くなってしまうていて、思い切り空へと腕を突き上げるように背伸びをすれば、コキコキと体の骨が鳴った。やはり田舎というだけあって地元よりも空気が綺麗だと思える。

草木が風に揺れ、田舎独特の土の香りが鼻をくすぐった。なにげなく見回した景色はここへ来るまでの景色と同じ、緑しかない。緑は目に良いとは聞きはするがここまで緑に囲まれていると気が変になりそうだ。

そんなことを思いつつ、再び視線は母のその後ろ姿をとらえる。何を思っているのか、ピクリと少しも身動きすることなくどこか遠い

所を虚ろな瞳で見つめている。その視線の先を辿ってみてもトモヤには何も見えないが、母にはきつと何かが見えているのだろうと思いい、特に気にする事はなかった。

そんな時、どこからか足音が聞こえてきた。それはだんだんとこちらに近づいてきているようで、音もそれに比例して大きくなっている。いよいよその姿が見えた時、トモヤは何とも言えない懐かしさを感じていた。

「あら、早かったねえ」

トモヤとサキの姿を見ても驚くということはなく、その人物はゆつくりとした足取りで車のあるトモヤ達の方へと近づいてきた。

「ばあちゃん」

歩きにくくはないのかと疑うほどに腰を曲げ、それでもしつかりとした足取りで歩く祖母の姿にトモヤはほつと安堵のため息をついた。なにしろ、トモヤと祖母が最後に会ったのは2年以上前の事で、久しく会っていないかった。しかもこんな田舎で一人暮らしをしている祖母を心配していないわけではなかった。小さい頃はそれなりにばあちゃんっ子と言っても良いほど祖母に懐いていた記憶がトモヤにはまだあった。共働きで忙しい両親に変わり、夏休みなどの長期間の休みには祖母のところへと預けられよく手伝いをしてきたものだ。しかしそれも、トモヤが成長していくにつれて、仕事にも余裕が出てきた両親もそれなりに家にいたので、預ける必要もなくなり、必然的にトモヤと祖母が会ったのは中学にあがる少し前になる、

「久しぶりやねえ、トモくん」

「…うん、久しぶり」

しわがくしゃくしゃと更にしわを作り、笑顔が作られる。懐かしい優しい笑みに、心が温かくなるような気分。つられて笑みをこぼせば、自然と笑顔になった。

サキは相変わらずぼうつとしていた。ただ、先ほどと違うのは眺める先がどこか遠い所ではなく祖母だということ。悲しげに目尻が下げられ、その表情はなんだか今にも泣き出してしまいそうで。

「おかえり、サキ」

それに気づいた祖母がサキに笑顔を向ける。

ハツとしたように顔を上げたサキの虚ろな目に初めて彼女の母の姿が映し出された瞬間、彼女はひどく泣きそうな声で、微笑み、小さく呟いた。

「ただいま、お母さん……」

退屈すぎる時間は、徐々に俺の体を蝕んでいく。

タチの悪い毒のようなそれは、じんわりと少しずつ、それでも確実に俺の中へと浸透していくのだ。

「……………」

時間は1時間前にさかのぼる。

なにしろ、俺でさえ久々にあちゃんに会ったのだから、当然母さんもばあちゃんと会うのは久しぶりなわけで。あの後すぐに家の中へと荷物を運びしばらく居間で適当にくつろいでいたが、積もる話もあるだろうと変に気を利かせてしまった俺はそこらへん探検してくると一言残し家を飛び出した。変に気を利かせたこともあるが、本当の理由はあの重苦しい空気に耐えられなかったから。以前の、明るいことだけがとりえの母とは思えないほど、今の母は暗かった。理由は分からなくもないが。俺だって、いきなりのことでもまだ混乱しているのだから。当事者である母は、それ以上なんだろう。

とにかく、今の母とふたりきりというのはごめん被りたかった。ただでさえ、走る車の中で無言の母と共に長時間過ごしたんだ。これ以上は、さすがにきつい。

しかしひとり家を飛び出たはいいものの、行く場所がない。ばあちゃんやド田舎と豪語するだけあって、本当にここは何もない。少し買い物に行くのでさえ車で2時間はかかってしまう。

そんな田舎のいいところと言えば、やはりこの緑だろうか。

東京ではあまり見られない一面の緑。なにも、すばらしく爽快な草原が広がっているわけではなく、山に囲まれている……というか山の中に住居があるのだからそれは当たり前な事で。ふと足下に目を向けてみれば見た事もないかわいらしい花が、なにげなく一本の木に近づいて見れば、蜜に引き寄せられてきたカブトムシやらクワガタやらが数匹いた。これ捕まえたならそれなりの値段で売れるのではないだろうかと考えてしまうほどの大きなものがここには普通にいた。

「…さすが」

ド田舎。

以前通っていた学校の友人達の中でも、これほどの田舎で育った親

をもったヤツはいないだろう。決して母さんをバカにしているわけではなく、こんなド田舎からエリートまで上り詰めたのだからむしろすごいと褒めているわけであって。そしてこんな場所で育った母さんを尊敬するまではいかなくとも、すごいとは思った。

それにしても、と思う。

かれこれ歩き続けて1時間以上は経つというのにも関わらず、景色が一切変わらないというのはどういうことだろうか。ミステリー……いや、怪奇現象か。神隠し？まさか田舎にきてこんな短時間で神隠しに合うなんて……。

そんなこんな考えながら歩いていると、ようやく開けた場所にたどり着いた。先ほどまでの路とは大きく違って、地面が土ではなく石だ。しかも、人工的に敷き詰められたものではなく、きつと自然に出来上がったのだろうと思える空き地だ。しかしそんな場所を見つけたからといって俺の退屈が紛れるわけもなく、仕方なく再び歩き始めた。ふと耳をすませてみればどこからか水の音が聞こえる。そういえば、幼い頃はあちゃん家に預けられていた時、大きな滝を見た事があったような気がしなくもない。あまりに昔の事なのでうる覚えでしかないが、この開けた道を抜けて少し歩けば滝は見えたはず。そう思い、少し歩調を早めた、その時だった。

「ねえ、君だれ？」

声が、した。

気配もなにも感じないこの場所にまさか人がいるとは思わず、勢いよく声がした方へと振り返る。

「……………」
「……………」

そこにいたのは、小柄なかわいらしい女の子。

黒のタンクトップに、パーカーの付いた半袖の上着を羽織り、下は膝丈までのズボン。左側の前髪にはヘアピンがつけられていて、その容姿は俺の知る中でもダントツ。後ろで手を組み、俺の顔を覗き込むようにして小首を傾げるその様は、かわいいとしか言いようがない。

「ここらへんで見た事ない顔だけど」

その言葉を聞く限り、どうやら彼女はここら辺に住んでいるらしいというか、こんな田舎にまだこんな子どもが住んでいるということに俺は驚いていた。しかも、田舎に置いておくにはもったいないくらいの人材。東京で歩いていれば即スカウトの話が持ちかけられそうなのでその容姿はすごく印象深く、思わず見惚れてしまっていたことに気づいたのは話しかけられてから数秒後。そして、ようやく俺の口から出たのはこんな言葉。

「こんなところに…女の子が住んでいたのか…」

驚くという方が無理だ。

幼い頃、何度かばあちゃんと近くにある民家を訪れてみた事はあるが、それらしい子どもに遭遇した事は一度もない。というか、子どもを見た事がない。住んでいるのはばあちゃんと同じくそれなりの老人ばかりで。遊びに行くたびに、しわしわの手でよもぎもちやらの自家製お菓子を握らせられていた。あの人たちも元気にしているのだろうか。

そしてそこでようやくあることに気づく。

もしかしたら、彼女も夏休みを利用して田舎に遊びに来た子なのではないのか、と。それは尋ねてみれば分かる事だ。

「ね、君って…」

「君さあ、喧嘩強い方？」

「は？あ、うん。それなりに」

尋ねようとした言葉を遮られ、俯き気味の彼女に突然投げられた問いに正直に答える。

俺の通っている学校は問題児が多かった。帰り道でカツアゲとかしよっちゅうだった。喧嘩売られるのも珍しくもないことだった。そんな地元で鍛えられ、いつからか不良相手でも逃げずに戦い、打ちのめせるくらいの力が俺には備わっていた。

それにしても、彼女は どうして突然そんなことを聞いてくるのだろう。そう思い、俯き気味の彼女を覗き込もうとした途端、その顔は上げられ、無邪気な笑みを浮かべた。

「それはよかった」

「っ！！？」

不意打ちだった。

かわいらしいその笑顔も確かに悩殺的な殺傷能力を秘めていそうではあるが、俺が言いたいのは笑顔ではなく、猛スピードで頬を直撃したその拳。その細い腕のどこにそんな力があるのか、不意打ちとはいえ俺の体がふつとぶくらの威力は十分にあった。驚きと、戸惑いが隠せず、呆然と俺を見下ろす彼女を見つめる。ニヤリと口端がつり上がっている所を見ると、手がすべっただとか、そんなベタな理由ではなさそうだ。

「さっすがハジメ！！ぶちのめせ！！」

「あいつハジメを女扱いしたぜ。死んだな」

「ははっ、バカなやつ」

そんな声がいろんな方向から聞こえてきたと思えば、上方にある岩

場からいくつもの子どもの顔が見えていた。彼らは興奮冷めぬといった感じで、歓声をあげ、もっとやれなどと俺に罵声を投げかけてくる。ざっと見て、二十人くらいはいるんじゃないだろうか。しかもそのほとんどは男で。

「どうしたの？ ああ、あいつらは気にしないでいいよ。ただの観客だから」

「……………」

「…どう？ オンナノコに殴られた気分は」

…最悪だ。

こいつ、男だったのか。

馬乗りになり、再び拳が振り上げられる。余程女に間違われたことに腹を立てたのかその顔に躊躇いというものは一切感じられない。殴られる、ともうすでに諦めて歯をくいしばり、目をつぶってみたが、幾度待てども予測していた衝撃は訪れず。

そつと目を開けてみれば、男の腕はきつと俺よりも年下だと思われる女の子の手によって止められていた。

「だめだよ、ハジメちゃん」

「……カヨ、離せ」

「だーめ。だって、離しちゃったらまたその人の事殴っちゃうんでしょ？」

につこりと純粋な笑みを浮かべる女の子に、ハジメと呼ばれた男はガリガリと頭をかき、やりづらそうに顔をしかめてはようやく俺の上から退く。その様子を見て安全だと判断したのかその女の子は彼の腕を掴んでいた手を離すと、こちらに目を向け手を差し出してきた。

「だいじょうぶ？」

いや、大丈夫って…。

首を傾げ尋ねてくる女の子にさっきのこともあって、今度は本物だよな、なんて疑心の目を向けてしまう。

そんな複雑な気持ちになりながらも、不機嫌そうな男を横目にその手を借りて俺は立ち上がった。

「ありがとう」

「うっん、いいの。いきなりハジメちゃんがごめんね？」

しっかりした娘だ…。

「おいカヨ。なにおまえ母親ぶってんだよ。そいつに謝る必要なんかねえよ」

「ハジメちゃんってば子どもー」

「あ…？」

「……………」

どうやら彼は女の子みたいだとか子どもみたいだとか、そういう類の言葉は禁句らしい。きつとそのかわいらしい容姿から女に間違われる事が多かったせいだろう。

知らなかったとはいえ、悪い事をしたかなとも思ったが、それでもいきなり顔面右ストレートはないだろうと考え直す。俺よりも背は低く、容姿は…何度も言うようだがかわいい。そしてとても先ほどの右ストレートを繰り出してきた本人とは思えないほど、彼の体は細い。筋肉どころか余分な肉すらないのでは、と思えるくらい。そんな奴に殴られ、しかも吹っ飛ばされたとなれば、俺だって男だ。それなりに悔しい。

「おまえも黙ってんなよ。喧嘩、強いんだろ？俺としようぜ」

だがしかし、せっかく女の子が止めてくれたというのに、それを無下にして相手の誘いに乗るのはどうかと思うわけで。カヨと呼ばれていた女の子は、そのハジメの言葉に眉間に皺を寄せている。彼曰く、観客はというと、相変わらず騒がしく中には喧嘩を促す声もあった。

「…喧嘩、ね…」

「そ。やられたまんまじゃつまんねえだろ？おまえも、俺も」

ニヤリと笑うハジメに、苦笑いを漏らした。どうやら、俺は挑発されているらしくその言葉に含まれるトゲはいっそ清々しい。カヨはもうあきらめたらしく、呆れたように深いため息については、睨むようにして自分より少し背の高いハジメを見上げていた。

「そう睨むなよ、カヨ。なに、俺だって嫌がる相手をいたぶるようなマニアックな趣味は持ってねえって。これは同意。喧嘩っつーと聞こえが悪いかもしれねえけど、ルールのないプロレスだって思えばいいだろ？」

「…結局は喧嘩ってことじゃない」

「そう言っつなよ。まあ、こいつが了承すればの話だし、な？」

「……………」

断るなよ、とその目が言っていた。目が口ほどにものを言うってこのことかと、初めてあのことわざを理解した瞬間。俺はため息をついて、小さく頷いた。途端に、歓声があがる。俺とハジメの喧嘩を期待していたギャラリーが騒ぎ始め、あろうことが自分も参加すると飛び出してくる奴もいた。もちろん、他の奴らに止められていたが。

「そうこなくっちゃ」

ニヤリ、と笑うハジメにカヨは仕方ないなといった感じで俺たちから離れていく。どうやらこの子ども達のボスらしいハジメの言う事に結局は逆らえないということを分かっているらしい。しかも、今回はハジメだけでなくまわりも参戦してきている。そりゃ、カヨひとりで止められるはずもないわけだ。

開けた場所に佇むは、俺とハジメのふたりだけ。

一見、体格の違いからして圧倒的に俺の方に利があるかのようにも見えるが、当事者の俺からしてみれば明らかにこちらの方が不利に思えた。いくら地元の不良を蹴散らせていた俺でも、所詮は都会の成り上がりものだ。機械や便利なものに囲まれぬくぬくと育った俺たちに比べて、こいつらは自然に囲まれ日常生活の中でも鍛えられている。負ける気はしないけれど、勝てる気もしない。頑張れば五分五分で勝負がつくだろう。

こんな成り行きで、しかもしょうもない理由で始まった喧嘩で俺が本気を出せたららの話だが。

「ほんじゃ、始めようか」

「…おう」

準備は整った。

ギャラリーもそろった。

今から始める喧嘩に、異論もない。

さて、どうやって引き分けに持ち込もうかと頭をフルに回転させる。直後、猛スピードでストレートを繰り出してきたハジメの先制を俺はするりとかわす。

思考がフル回転する頭の中で、小さく、勝負のゴングが鳴ったような気がした。

「納得いかねー…」

そう呟いたのは、まさしく言葉の通り納得のいかなさそうな顔をしたハジメだった。不機嫌そうに口を尖らせて、すねたように座り込んでいるその姿は、まさしく子ども。いじけた子ども。

「知らね」

「だーっ、うぜえ！！つかこれ反則だろ！！」

「喧嘩にルールなんてない。よって反則なんてもんがあるわけがない」

「…卑怯者。俺びしょぬれじゃねえか」

ハジメが納得できないと嘆くのも仕方がないと思える。

というのも、俺が引き分けに持ち込むために起こした作戦は、案の定近くにあった川に誘い込みスキを狙ってはその体を川へ落とした方法だった。おかげでハジメの服だけでなく、全身が水に濡れ、さらに、これは誤算だったが川に落ちたさいにハジメのズボンが脱げて流れてしまったのだ。だからハジメは上着で下を隠しながら、反撃も出来ずに俺を睨みつけているこの現状。ちなみに流れていってしまったズボンは仲間のひとりが取りに行ってくれている。

「しつこいわよ、ハジメちゃん。反撃出来ないのはハジメちゃんなんだから、負けたって素直に認めなさい。…まあ、納得いかない気持ちは分かるけど彼の言う事も一理あるし、だからといってハジメちゃんの負けっていうのもみんな納得いかないだろうし、この勝負は引き分け！」

さすがしつかりもの。カヨの判定はまさしく俺が望んでいたものであり、この場を収めるには最もな判断だ。ちなみに外野は相変わらずうるさく叫んでいたりする。やかましいやつらだと思いつつも、本当に仲がいいんだなと少しだけ羨ましくも感じた。都会の友情は、ごく稀に例外がいたとしても、ほとんどが冷めた関係だ。不良に絡まれてしまえば簡単に友人を置いてひとり逃げてしまうだろう、そんな脆い友情。別にそれが悪いとは言わないし、そりや不良に絡まれて自分だけでも逃げられるならば逃げてしまうのが人間の本能だ。所詮人間は自分が一番大切なものだから。特に危機的状況に陥った時などに、そんな人間の醜い本性は見えてくるものだ。でもきつと、こいつらは違うのだろうと思った。上辺だけの浅はかで脆い友情なんかではなく、もっと強い絆をもっているのだろうと、出会ったばかりの俺でさえその光景を見れば分かってしまうほどに。

「んじゃ、俺帰る」

「は！？てめつ、勝ち逃げかよ！！」

「何言ってるんだよ。引き分けつつたじゃねえか」

「俺は認めてねー」

「知るか。それに…」

しつこいハジメに思わず深いため息をつき、おもむろに空を見上げてみる。

明るかったはずの空も、いつの間にそんな時間が経ってしまったの

か日が落ち始めてきていた。

「子供は帰る時間なんじゃねーの？」

「……………」

ぽかん、と呆気に取りられたような顔は笑える。

確かに、今思えばこんな奴を女の子に見違えた数時間前の自分がどうかしていたと思える。ようやく言葉の意味に気づいたのか、濡れたシャツを震える手で強く握りながら…叫んだ。

「つつ、てめえ！！まだガキ扱いする気が！！」

「ははっ、じゃあな」

「待てこんなにやるーッ！！！」

ぎゃーぎゃーと喚く声を聞きながら、手を振りその場を去る。しばらく聞こえていた叫び声も、開けた空き地を抜ければさすがに聞こえなくなった。それでも、あのハジメという奴の間抜けな顔や怒った顔を思い出すと自然と顔がほころぶのが分かる。

つまらないだけだと思っていた田舎にも、あんなに楽しい奴らがいるかと思うとこの先の田舎暮らしが少しだけ明るく見えたような気がした。

これが俺とハジメとアイツらとの、初めての出会い。

それは少し衝撃的で、少し笑える、不思議な不思議な、それでいて必然的な出会いだった。

第2話

「どこ…行つてたの？」

帰るなり、そんな言葉が母親から問われた。

まさか放心状態だったはずの母からそんな言葉を…というか声をかけられるとは思っていなかった俺は、少し戸惑いながらも小さな声で散歩とだけ答えた。それに対して母は、そう…、とまた俯いただけ。どうやら心配したとかそういう類のものではなかったらしく、ただ単に決まり文句のようなものだったらしい。本人に直接そう聞いたわけではないけれど、きっとそうだ。じゃなきゃ、あんなにも嘘丸見えな答えを受け流すわけがない。数ヶ月前までの母ならば、どこまで聞くつもりだとうんざりするほど質問攻めをしてきたはずだった。

別にそうしてほしいわけではないけれど、今の母さんを見てるとなぜかイライラした。反抗期の時のようなイライラではなく、なんとも言えない苛立ちが俺を追いつめる。

だから…すぐに居間を出た。

ばあちゃんはまだ畑で、今家にはふたりきり。

今の母さんと話す事なんてなにもない。そう、なにも…。

「…っ、くそ!!」

苛立ちが増す。

母さんの事が嫌いなわけではない。でも今の母さんは嫌いだ。どんな理由で父さんと離婚したのかは知らないけれど、でも母さんは父

さんとちゃんと話して、自らの決断で今こんなところにいるはずのに、それを後悔しているのかまるで魂が抜けてしまったかのようにぼうつとしているばかりで。

あんな母さん見たくない。

後悔先に立たずとはよく言うものだけれど、それでも自分が被害者かのように、あんな風に自らの殻の中に閉じこもってしまうのは卑怯だ。巻き込まれたのは俺だ。理由も聞かされず、あれよあれよと父さんと引き離されてしまったのは息子の俺だ。母さんはまだいいだろう。別れた理由を知っているのだから。だが俺は知らない。わけもわからず、何不自由のなかった地元からこんな田舎まで連れてこられた。

光が見えたはずの田舎暮らし。そんな前向きな思いさえ、母さんは踏みこじろつというのか。離婚に反対はなかった。夫婦というのは互いの信頼親愛あつてこそそのものだから、なにかしらのすれ違いがあつてその結論に至つたのなら俺に口出す権利などない。例えば俺がふたりの実の息子であっても。むしろ俺を氣遣つてぎこちない夫婦ごつこを続けられるよりは幾分かこちらの方がマシだった。

「……………」

割り当てられてた自室は静寂に溢れていて、隙間風が入っているのかどこからか空気の流れを感じた。あるのは一組の布団と小さなテーブルと、持ってきていたリュックだけだ。殺風景なその部屋は余計に憂鬱さを増加させる。リュックの小さなポケットに突っ込んでおいた携帯を取り出し、時間を確認してみればいつの間にか午後7時を回っていた。テレビはあるが、元があまりテレビを見ない性質でいくらやることがないからと言ってそれに縋るにはどうも気が乗らない。携帯でインターネットでもしようかとも思ったが、さすがド田舎。電波は一本とも立っておらず、忌々しい圏外という文字が表示されているからそれも叶わない。さてどうやって時間を潰そ

うかと考えていると、居間のほうからばあちゃんの声が聞こえた。いつの間にか帰ってきていたらしく、夕飯が出来たと叫んでいた。

「どうしよ…」

再び何も見えない闇に放り出された気分。

なにもすることがなくて、このまま夏休み期間中の間に体が腐っていきそうだ。

とにかくばあちゃんお手製の料理を平らげてしまおうと俺はおろしていた腰を上げ、部屋を出ると再び気まずい空気の中へと飛び込んで行った。

「トモくんはにんじんが食べられなかったのにねえ。見ない内に大きくなっていつの間に食べられるようになったんだい？」

「ばあちゃん…。俺だってもう子供じゃないんだから…」

いつまでも小さな子供扱いが抜けないばあちゃんに苦笑いで答えながらも、食卓に並べられた色鮮やかな料理に手をつけていく。焼いた魚に肉野菜炒めにみそ汁。昔ながらのばあちゃんお手製の煮物に、白いご飯。そしてばあちゃんが栽培した野菜で作ったであろうサラダ。どれもこれも懐かしい味ばかりで、少し苦手なにんじんでさえも普通に美味しく食べる事ができた。相変わらず母さんは無言のままで、その料理を食べている。そんな母さんを気にする事もなく、普通に話を進めていくばあちゃんは結構すごい人なんだと思えた。食後に出されたのはうさぎの形をしたりんごで。そういえばずっと昔に母さんもこんなものを作ってたなと思いにふける。

畳ではなくフローリングだった我が家。テーブルに並べられた料理を囲む母さんと父さんと俺。楽しかった思い出がまざまざと頭の中

にエンドレス。

なんだこれは。思い出に感慨深くなるなんて俺らしくもない…。

「ばあちゃん、電話借りるね」

「ああ、そこにあるからね」

「ありがと」

色鮮やかに食卓を飾っていた料理もほとんど食べ尽くし、ごちそうさまと席を立った俺はいそいそと子機を片手に自室へと戻る。居間を出る直前、テレビを無心に眺めている母さんが少し心配だったが、俺が気にしてもしょうがないだろうと思いなんの声もかけることなく襖を閉めた。

自室に戻り、畳に投げてあった携帯を取るとリダイヤルから目当ての番号を探し当てる。その番号に子機をつかってかけようという寸法。クラスメートには何も言えなかったが、一応ひとりだけ…属にいう親友と言えるアイツにだけ田舎に行く事を伝えていた。そのことを伝えた時に、絶対に電話しろよという半強制的な約束をさせられてしまった為、ばあちゃんに電話を借りてでも連絡を入れなくてはならなかった。

俺の親友は魔王だ悪魔だ天使の面した堕天使だ。

連絡をいれろと言われたならば、連絡をいれなければならない。さもなくば奴はこちらまで押しかけてくる。冗談とか脅しとかそういうものでなく、本気で。そして俺を殴る。一発どころか気を失うまでなんの言葉を発する事もなく無言で無表情で。謝る余地も言い訳する余地も与えることなく。そして目が覚めた俺に言うんだ。

『電話しろって言っただろ?』

きつとそうだ。

謝るなんてアイツの辞書に載っていない。いや載っていたとしても油性マジックで黒く塗りつぶされている事だろう。アイツが俺に謝ったことなんてかつて一度もない。と言っても、大抵悪いのは俺な

のだからアイツが謝るわけもないのだが。

「……………」

出ないで欲しい出ないで欲しい。

そう切に祈りながら、プルル…と鳴り始めた子機に耳を当てる。そんな俺の願いも虚しく、あるうことが奴はわずか3コール目で取りやがった。

『…おつせえよ、ばかトモ。ぶつ殺すぞ』

「ごめんなさい!!」

何を隠そう奴は【響】という不良チームに属している。言葉遣いが悪いのはそのせい。俺の親友もとい工藤彼方。開口一番の言葉は殺傷能力抜群のひつくい声。なにも悪い事はしていないはずなのに、相手に悪い事をしたと思わせるのはカナタの特技だとも言える。

「カナター、寂しいよー。初日にして挫けそうだよー」

『バカじゃねえの』

「友達がいのない奴め…」

『あ？今更かよ』

「そうでしたね」

『ああ!?!』

「自分で言っただんじゃん!!」

理不尽な理由で不機嫌な声になるカナタに俺はもう謝る気にもなれなかった。でもやっぱり親友とだけあって、不思議と心が休まる。カナタは友達だ。いくら性格が悪かろうが、魔王で悪魔で堕天使だろうが、昔から唯一俺を甘えさせてくれる友達だ。他の上辺だけのダチとは違う、本当の意味での友達。地元を離れたくなかったのは、

カナタと離れてしまうことも理由にあった。田舎に行く事を伝えた時に思わず泣いてしまったのは俺だ。かつて一度としてなかったカナタと違う場所、学校。人見知りは激しい方ではないのだが、カナタがいたから今まで新しい中学でも上手くいっていたと自信を持って言える。

『俺が恋しいなら帰ってこい。てめえひとりぐらい俺が養ってやるよ』

「…カナタあいしてる」
『ばっか、きめえよ』

なんだかんだとこうやって優しい言葉をくれるカナタが好きだ。目の前にいたならば、真っ先に抱きついて親愛のキスを頬にしていたことだろう。…俺が女の子だったならば、絶対にカナタを好きになっっていたな…なんてあり得ないことを考えてみれば、なぜだか吐き気を覚えた。

「カナター。会いに来てー」
『お前が来い』
「車も運転出来ない俺にどうやって行けと」
『だったら俺も同じ条件じゃねえか』
「…そうですね」

ああでもカナタはバイクを持っていた。不良グループでたまに走り回っていたのを見た事がある。さすがに嫉妬なんてもんはしないが、自由奔放なカナタを羨ましく思ったのは俺だけの秘密だ。

せっかく長い夏休みなのに、カナタとも会えず遊びに行く事も出来ず。なんだこの拷問状態な俺は、いつもよりも少し涙脆くなっているらしい。滲んできた涙を袖で拭い、なんの声も聞こえてこない電話がまどろっこしく感じる。カナタはあまりしゃべらない。俺も力

ナタという時はあまりしゃべらない。電話なんて指折りで数えられるくらいしかしていない。ただ同じ空間にいて、それぞれが違う事をしている。それだけで良かったのだ。それがなぜか楽しかった。

『夏休み中には会いに行つてやるよ』

「……………」

『それまでに泣いてみる。ただじゃおかねえ』

「カナタ…」

『お前が泣いていいのは俺の前だけだ』

「好きになつていいですか」

『今更だろ？』

「自過剰—」

『そんな自過剰男に愛してるだの好きだの言ってるのはどこのどいつだ。まったく趣味が悪い。俺は嫌いだけだな』

「俺は大好きだよ」

『いっとけ』

カナタが笑った。俺も笑えた。

やっぱりカナタはすごい。なんで俺が泣きそうなのが分かるんだ。電話越しなのに。俺は全然カナタが今どんな顔しているかなんて分からないのに。カナタはすごい。さすが俺が惚れただけある。そういう意味じゃないけど、大好きだ。

その後適当に今日あったことを話した。

殴られた、と言った時のカナタは俺を小馬鹿にするような言葉を吐いていたが、その時の声は怖かった。怒りのオーラがこちらまで伝わってきた。弁解するようにわけを話せば、納得したのか今度は本気でバカにされた。そっち行った時鍛え直してやるよ、なんて恐ろしい言葉まで聞こえてきた。あれは空耳であつたと信じたい。

名残惜しくも通話を切り、敷かれた布団に横になる。

カナタが会いに来てくれる。

それだけで、機嫌がよくなるなんてどれだけ単純なんだと、自分を笑った。

窓の外にぼっかりと浮かんだ月。夜空に散らばる星光。
ふと頭に浮かんだ天体観測という文字。
それは、唯一の俺の趣味でもあった。

「…カナタを見習い、不良街道まっしぐら」

そんな意味不明な言葉を吐き、俺はさっそく立ち上がると誰に告げる事もなく家を飛び出した。

虫が鳴く。吹き荒れる風に木々がざわめく。外灯すらない田舎道は月明かりだけをたよりにするしか歩く術はない。ポケットに手をつ込んで、月明かりに照らされた路を歩く。一本道だから迷う心配なんてない。ここには不良達も変質者たちも、というか人っ子ひとりいない。誰も知らない俺が今この場所を歩いているという事。なんだかいけないことをしているみたいでドキドキしたが、好奇心旺盛な心はワクワクしていた。

天体観測。

望遠鏡もなにもないけれど、そんなごちゃごちゃしたものはいらない。眺めるだけでいい。夜空に浮かぶ…正しくは宇宙に漂う星たちを眺める事に楽しみを感じるのだと。俺に天体観測という楽しさを教えてくれた人はそう言っていた。現に彼は望遠鏡も持たずただピルの屋上に座って星を眺めては笑みを浮かべて俺に星の名前を教え続けていた。あれがデネブだの、アルタイルだの、幼い頃の俺にはちんぷんかんぷんで。それでも少しずつ星の名前を覚えては、たまにふらりと家を抜け出して星を見ていた。

懐かしい思い出。

俺に星の名前を覚えてくれた人はもういないけれど、思い出はちゃんと胸の奥に、決して消えてしまわぬようしっかりと刻んでいる。

「イチ…」

そういえば、最後に彼と一緒に星を見たのはいつのことだっただろう…。

開けた道を抜けて、昼間ハジメという少年を突き落とした川。そこには岩場と岩場をつなぐように古びた橋がかかっていた。滝が大きな音を立てて、闇の静寂をかき消す。橋の真ん中に、足を投げ出して寝転がってみれば見事に夜空一面の星を堪能する事ができた。

「絶景」

木々が回りを囲むように連なっているが、決して視界を遮るなんて事はない。絶景。こんな穴場があったとは知らなかった。幼い頃にこれを見逃していたのかと思えば非常に悔やまれる。小さい頃の俺は、夏の星座がなにより好きだったのに。

「なっ…」

「ん？」

「なんでお前がここにいるんだよっ！！」

「いちゃ悪いか」

橋が揺れたと思ったら、どうやら人が近づいてきていたらしい。人の気配も読めなくなっただなんてカナタに知られたらどうなることやら。きつと拷問という名のおしおきかな。

「悪いに決まってるだろ！！」

「それはそれは…。どうもすみませんね」
「謝る気ねえだろ!!」

うるさいよ、ハジメ少年。

俺は静かに星を観察していたのに、それを邪魔するというのか。
橋からたたき落とすぞ。

せつかくの絶景ポイントでの天体観測を邪魔されたからか、非常に
今気分が悪い。なぜこんな時間にハジメがこんな場所にいるのか。
人のこと言えないから聞く事はできなかった。もしかしたらこのハ
ジメの年頃の奴は不良とか夜遊びに興味の出始める時期かも知れな
いし、もしかしたらハジメもこの絶景ポイントを狙って天体観測を
しにきたのかもしれないし。どうでもいいが。とにかく、邪魔だけ
はしないでもらいたい。

「そこは俺の場所なんだよっ!」

「名前なんて書いてなかったぞ」

「書くか!!くっそ、秘密の絶景ポイントだったのに…。つかなん
でお前こんな時間にこんなところにいるんだよ」

「……………」

絶景ポイント?まじで後者の方だったのか…。

顔にはひどく似合うが、性格には非常に似合わない。見るからに天
体観測なんかよりもバイクとかそういう類に興味を持ちそうな…言
うなればカナタと同じ様な性格をしている。いやいや、あんな魔王
様と同じ性格がそこら辺にばいばいいいてたまるか。

「たぶんお前と同じ理由」

「あ?家出か?」

「お前家出かよ!!違う…天体観測」

「……………まじで?」

呆然としたような声が気になり、ハジメを見ているとその顔はすばらしくキラキラと輝いていた。いや目の錯覚か？月明かりマジックか？そうだ人間の顔が輝くわけがない。目がキラキラしているような気もしたが、あまり深くはつつこまないようにした。

「え、え？まじ？お前星好きなの？」

「あー…まあ、うん」

あ、だめだこれ。

あれだ。同族を見つけた時のような顔をしている。つまり妙に表情が活き活きとしている。関わっちゃいけないような気がする。でももう遅い気がしなくもない。

「やった！！まじで！？初めて見た俺と同じ趣味持ってるやつ！！だよなつ、星っていいよな！！アイツらは全然興味なくてさ、だから俺ひとりで…ってあー…」

「あー？」

「昼間は悪かったな。確かに女に見間違えたお前が悪いけど、いつもならあんなすぐ手は出さないんだ。昼間はちよっとむしゃくしゃして…。頬、大丈夫か？」

「……………」

まさか向こうから謝ってくるとは思っていなくて、度肝を抜かれた。呆然としている俺を気にもとめず、ハジメは勝手に頬を撫で、腫れてはいないなどと診察をしている。しばらくしてハツとした俺は勢いよく後退ると思わず身構えた。

なぜだかこう、素直に謝られるとなにか畏でもあるんじゃないかと疑ってしまう癖がカナタのせいで身に付いてしまった。今更だが俺はなぜカナタの親友をしているのだろう…。

「だ、大丈夫大丈夫！！慣れてるからさっ、あははー…」

「そうか？ならいいんだけど…。あ、俺はハジメ。よろしくな、趣味友達」

「趣味友達って…まあいいけど。俺はトモヤ、よろしく」

昼間とはえらい待遇の違いだった。

でもこれで、暇な時にはここに来てハジメを話し相手に暇を潰す事ができるかもなどと考えていると、目の前に手が差し出される。最初は何を意味するか分からなかったが、どうやら握手を求めているらしく俺を素直にそれに従った。がっしりと繋がれた手。一回り小さく感じるその手のひらはあたたかくて、嫌な気はしなかった。こうして俺は、カナタとは違う意味のトモダチがまたできたのだった。

猛暑。

ここまでくると、本気で地球温暖化が心配になってくる。

人間は非情な生き物だ。どんなに回りに被害が及んだということを知っていても、実際自分たちに被害がなければ必死にならない。解決策なんてもんはいくらでもあるのに、それをしないのは人間という生き物が非情で、貪欲なものだから。そしてそんな自分たちのそ

んな性質に気づいていながらも、それをなおそうとしないのは目の前にある幸せにしか興味がないから。
人間は非情な生き物だ。

「なんでハジメとそいつが一緒にいるんだよ!!」

そう叫んだのは、たしか昨日ハジメのながされてしまったズボンを取りに行った少年だ。納得がいかないと言った感じに声を張り上げ、地団駄を踏んでいるその姿は年相応。その横にはにこにここと笑みを浮かべてこちらを観察しているカヨの姿。

「ハジメちゃんと仲良くなったのね。よかった」

「昨日は迷惑かけてごめんな」

「いいのよ。そのかわり、私とも仲良くしてくれるわよね？」

「もちろん。よろしくな、カヨ。俺はトモヤ」

「トモくんね」

かわいらしいその呼び方に、苦笑いを浮かべた。

トモくん、なんてばあちゃんぐらいしか呼ばない。慣れないその呼び方に恥ずかしさを覚えつつも、カヨの頭を優しく撫でた。小首を傾げてにこりと笑うと、少し高めで結われたツインテールが揺れる。しっかりものでかわいくて、妹にしたい感じ。そういえば、ハジメとカヨは兄妹なのだろうか。

「俺を無視するなーっ!!」

「うつせえぞマサキ!! お前も下の奴らと遊んでこればいいだろ!

」

「ハジメも!! なにそいつの膝なんかで寝てんだよ!!」

「寝心地がいいから」

「ハジメー……」

騒いでるこの少年の名前はマサキというらしい。

情けなく眉を下げ、未だにハジメに縋ろうとしてる様子を見ている限りそうとうな執着心を抱いているらしい。

確かに俺もこの体制には疑問を抱かざるを得ない。なんで俺はハジメに膝枕なんかしているんだろう。

「俺の親友も言ってたな、それ。意味わかんねえけど…別に寝心地よくはないだろ？女みたいにプニプニしてるわけでもないし」

「わかんねえけど、なんか安心する。固いし、触り心地がいいわけじゃないけど…なんでだろうな」

「……………」

聞いてんのはこっちだっつーの。

起きる気配を見せないハジメに半分呆れつつも、正直もう諦めていた。膝枕はカナタで慣れている。別に苦でもないし、恥ずかしいのは俺じゃないし、どうでもいい。

「マツキーも。いつまでも意地張ってないでトモくんと仲良くすればいいじゃない。ハジメちゃんが認めたのよ？悪い人なわけないわ」
「カヨちゃんまで…。あーもーっ！分かったよ！！認めればいいんだろ認めれば」

深くため息をつくマサキはようやく決心したのか、カヨと同じく右手を差し出してきた。その手をじっと見ていると、じれったいのか俺の手を取って無理矢理握手をさせられる。

「…マサキだ」

「トモヤだ、よろしくなマサキ」

「よ…ろ、しく…」

そう小さく呟いたマサキの顔は真っ赤。つい先ほどまで突っ張っていたからその言葉が恥ずかしくてたまらないのだろう。笑みを浮かべてその手をほどけば、すねたように橋から飛び降りた。今流行のツンデレというやつか、反応が新鮮でなぜか顔がにやにやしてしまふ。

「…きもい」

「うつさい。つか、ハジメとカヨは兄妹なのか？」

先ほど疑問に思った事を尋ねてみれば、心なしかハジメの顔色が変わったような気がした。

「兄妹じゃないよ」

そう俺の問いに答えたのはカヨで。

「私とハジメちゃんは兄妹じゃないけど、ハジメちゃんには…」

「カヨ、言わなくていい。別に知らなくてもいつか会っただろ」

「…そうだね」

「……………」

どうやら、ハジメとカヨは兄妹ではなくただ兄妹のように仲がいいだけで、ハジメには他に兄弟がいるらしい。それが兄か弟か、妹か姉かは知らないけれど。…ハジメはあまり知られたくないといった風に見える。

「気にすんな」

「…ああ」

俺とハジメの間に引かれた薄い線。
飛び越えることはあまり難しくないだろうが…なぜか勇気を出せない自分がいた。

第3話

滝の音は相変わらずけたたましい。

橋の下にある川では、同じ歳くらいの子供達が水球やら水かけ遊びやらをして遊んでいる。さすが田舎の子供。都会でのインドア精神がまだ抜けきらない俺は、いつも通りここにやってきてはその風景を眺めたり、たまに寄ってくる子供の相手をしたり、ハジメと星の話をしたりとしていた。

やはりハジメはこの周辺でのリーダー的存在らしく、明らかに回りのやつらとの待遇の差がある。崇められているというか、頼りにされているというか。そしてなぜかハジメと一緒にいる俺も少し待遇の差が出始めてきていた。

「ねえ、ねえトモくん。東京ってどんなところ？」

「普通のところだよ。まあ…さすがにここほど緑はないけど、テレビとかで映ったりするだろ？」

「あまりテレビは見ないから分からない」

「まあ東京とかよりは此処の方が楽しいとこなんじゃない？俺もなんかこっちの方が充実してる感じるし」

「本当？トモくんはここが好き？」

「うん、好きだよ」

「よかった」

にこりと笑みを向けてくるカヨの頭を撫でる。一人っだからよく分からないけど、妹がいたらこんな感じなんだろうなあ、なんて思った。ハジメは余程俺の膝が気に入ったのか、俺を見つけてはすぐにそれを強要してくる。夜も似たようなもんだ。ゆったりと星の話をしながらも、体制は今と大して変わらない。俺は足をのばして座り、

ハジメは当然かのように膝に頭を乗せる。嫌ではないのだが、なんとなく周りの目が気になる。アイツらは見慣れたといった感じで何も言っていないが、逆にそれが気になる。俺も思春期だし、微妙なお年頃な訳だし、男同士で何をやってるんだと疑問に思う事もあるわけ。地元ではカナタに強要されていたからそれなりに耐性はあるにしても…うん、微妙な心境だ。

「トモさん！一緒に水球しませんか！？」

「……………」

「…トモさん？」

「ああ…うん、後で参加する」

「分かりましたあ！」

明るい声で再び川へとダイブする少年に複雑な視線を向ける。

俺を呼び捨てにするのはハジメとマサキくらいで、カヨはトモくん。そして他の奴らはなぜかトモさん。ちなみにハジメはハジメとちゃんと呼ばれている。ひとりさん付けされているのはなぜか。理由を聞いてみたところ、なんだか同じ歳には思えないらしい。つまりは目上と認識されてしまっている。地元ではさんざん童顔やらなんやら言われていたのに、ここではなぜか年上扱い。なんなんだ…とぼやいていたところをたまたまハジメに聞かれていたらしく、あまり深く考えるなと言われた。

「そつえば、トモはどこに家があるんだ？」

「どこって言われても…」

どうにも説明しようがない。

家の近くに目印になるような場所はないし、まわりは当然緑、緑、緑。

「ここから一時間くらい歩いたとこ？」

「ふーん」

「なんだよ。うちに来る気か？」

「別に。気になったから聞いただけ」

そっけなく返されてしまえば会話はそれ以上続く事はなかった。そういえば、ハジメたちもここ周辺に住んでいるらしいけれど、実際家屋を見た事がない。東側の山にあるのか。ちなみに俺は真逆の西側。

東と西の山に挟まれるようにして、この川は流れていた。聞けば幼い頃から遊び場なんてもんはここくらいしかないらしく、必然的に集まった子供達は何気なく仲良くなって、いつの間にかハジメはリーダーに仕立て上げられていたらしい。いったいどういう経緯でハジメがリーダーと認識されたのかは知らないが、よくこの小柄な少年がリーダーと認められたなと思う。やっぱりあれか。喧嘩かな。ハジメは強い。そりやもうまともにやりあったら俺に勝ち目はないくらい強い。

この細い腕にどれほどの筋力が隠されているのか、それは本人のみぞ知るというやつで。

「さて…と」

「参加するのか？」

「だって暇だし。ハジメもやらない？」

「…行く」

せっかく誘われたのに、その好意を無下にする事はできない。少し不機嫌そうに尋ねてきたハジメにも誘いをかけてみれば素直にこくりと頷いた。

この田舎にやってきて数日と経つのだが、そういえば俺はハジメが他の少年達と遊んでいる所を見た事がない。俺がここに来る時間に

はハジメを筆頭にほとんどの少年達が集まっていて、それぞれ遊んでいる。ハジメはというと、俺を見つけるなり膝枕を強要しては睡眠に入ってしまう。俺が来る以前はいつたいていどうしていたのか、少し気になるところだ。

ちなみに俺はというとハジメに膝枕をしながらカヨと話をしたり、マサキが突っかかってくるのを適当に受け流したり。たまにハジメと同じく仮眠にふけったり。家にいるよりは幾分マシだが、やはり暇なものには変わりない。本当に学校始まる時には体が腐ってるんじゃないかと心配になる。だから今日は珍しくアイツらの誘いに乗ってもいいかなと思ったのだが、隣にいるハジメはどこか不機嫌そう
だ。

「俺も混ぜろー!!」

「トモさん!？」

ダイブ。

橋から水面まで約10メートルはくだらないんじゃないだろうか。勢いで飛び込んでみたはいいが、正直あの高さをなんの躊躇いもなく飛べた俺はすごいと思う。たぶん、俺よりも小さい子たちが普通にぴよんぴよん飛ぶのを見たから、案外簡単そうだなと思っていたからかも知れないけど。

突然川に落下してきた俺を見て、驚いたのか水球は一時中断。続いてハジメも落下してきて、水しぶきが再び舞う。

「いれてくれるんだろ？」

そうにつこり尋ねれば、急にみんな笑顔になってゲームを再開した。チームモルールもあったもんじやない。とにかくボールを奪って適当にゴールと決めたその場所へ投げる遊び。本気で飛びかかってくる少年達を避けてはボールを掴んだまま泳ぐ。少しでも気を抜けば、

ここぞとばかりにマサキがタックルをしてきてボールを奪われた。奪って、奪われて、また奪ってゴールを決める。誰かがゴールを決めたなら、誰かがナイスとばかりに拍手と歓声をあげて、誰かは悔しそうにでも楽しそうにまたボールを追いかける。

終わりのないゲーム。それは体力が尽きるまで続けられて、日が暮れる頃にはみんな息を切らし岩場に寝ころんでダウンしていた。

「なさけねえ」

「っ、うっさい…、はっ、なんっで、ハジメは…んな体力有り余ってんだよ…っ」

唯一ひとり、ハジメを除いては。

「お前がバカみたいに突進していくからだろ？どこにボールが飛んできて、誰が誰にボールをパスするかなんて見てれば分かる。先回りして、ボール奪って、ゴールしたらそれで終わりだ」

「……………」

「なんだよ」

「あ、いや…」

呆然とハジメを見つめていた俺に、いぶかしげな視線が投げられる。まるでそれが当然かとも言うかのように、淡々と並べられた言葉には温度なんてもんはなくて。いやそれが悪いというわけではないけれど、この田舎の子供達の中では、なぜかハジメは異様なものに見えて仕方がない。

「…楽しい、か？」

「は？」

「いや、そんな計算しながら遊んで楽しいのかな…って」

ここのやつらは純粹だ。遊んで遊んで遊んで、体力が尽きるまで体をがむしゃらに動かして。後で疲れるのは自分なのに、そんなの気にする事もなく、体力の限界も考えずに遊んでいる。それはとても楽しい事だ。俺だって、楽しかった。だからダウンしていても、疲れて何もやる気がおきないのだけど、寝ころぶみんなの表情は笑顔だった。楽しかった？って聞けば即答で楽しかった！と答えるだろう。

「スポーツじゃないんだからさ、適当にボール取りに行つて、ボール投げればいいじゃん。そんな計算しないでさ、自分の体力使い切るまで遊ぶのが楽しいんじゃないの？」

「…んなの、疲れるだけだろ」

「疲れたっていいじゃんか。楽しかったらそれで」

「……………」

押し黙るハジメ。それを見つめる俺。

分からないんだろうか、ハジメには。一見一番そうというのが大好きそうに見えるのに、それはただの俺の偏見だったんだろうか。いや違う。だってハジメは、初めて会ったあの日、初めて喧嘩をしたあの時。目が輝いていた。楽しそうに全力で俺にぶつかってきていた。きつと、不器用なだけ。どうすればいいのか、分からないだけだ。

「ハジメちゃんは不器用だからねー」

「カヨ…？」

「私は分かるよ、トモ君が言ってる事。楽しいよね、体動かなくなるまで遊ぶのって」

「…うん」

楽しかった。今日はすごく、楽しかった。

「でもね、ハジメちゃんは分からないの。だってやったことないんだもん。限界まで体動かして、何も考えずにがむしゃらに遊んだ事がないの」

「そんなの…」

やればいいじゃん。

そしたら分かるよ、俺が言ってること。何が楽しくて、何がつまらないのか。俺が言っている事がどんなに楽しい事で、ハジメの言っている事がどんなにつまらないことなのか。

「そうだね。明日は、できるといいね。ね、ハジメちゃん」

「…ああ」

小さく頷くその頭は、なんだか寂しい。

「じゃあ、そろそろ帰ろうか」

そのカヨの言葉に、少年達から批判が上がる。まだ遊びてえだの、まだ暗くないだの、相当まだ遊び足りないようだ。もう体力はなかったはずなのに、この短時間で回復するなんて…侮れない、田舎少年の体力。

「トモさん、明日また勝負しましょうねー!」

「今度はちゃんとチームに分かれて勝負しましょうね!俺、負けませんから」

「また明日ー」

カヨの説得のかいあって、口々に別れの言葉を俺に投げかけてくる。

かつてないその反応に少し戸惑っていた俺に、カヨは言った。

「みんな嬉しかったんだよ。せつかくの珍しい新入りなのに、ハジメちゃんが独り占めしてるから。初めて遊んで、楽しかったし、嬉しかったんじゃない？」

「そんなもん？」

「そんなもんそんなもん。じゃあ、私達も帰るね。また明日」

「ああ、うん。また明日…」

ハジメの手を引いて歩いていくカヨ。ハジメは心此処にあらずといった感じで、振り向きもせずただ俯いてカヨに引かれるままトボトボと歩いていく。なにをそんなに落ち込んでいるのか。理由は夜にでも聞けばいいかと思い、俺も誰もいなくなつたその場所から離れた。

夜、夕飯を食べてカナタに電話するのが俺の日課となりつつある。この時間、いつもカナタは夜遊びで忙しいはずなのに、不思議とその電話に出なかった事はない。初日の落ち込んだ俺を気遣ってくれているのか、その声音もどこか優しい気がする。

『つまんねえ。そろそろ限界だろ？こつち帰ってこいよ』

「無茶言いますね、カナタさん」

『養ってやるって』

「嬉しいけど、今すぐにも財布と携帯だけでその胸に飛び込みたいくらい嬉しいけど。…母さんをおいてくことはできないんですよ、カナタさん」

『お人好し』

「どうとでも」

こんな会話がエンドレス。

余程カナタは俺を連れ戻したいらしく、毎回毎回電話かけるたびにこれだ。養ってやる、なんて言う。その言葉は嬉しくてたまらないけれど、現実そうはいかないものだ。カナタなら言葉通り本当に俺を養うくらいわけないだろう。なにげ坊ちゃんだし。そうじゃないにしても、なぜか金だけはあるし。家広いし。部屋余ってるし。1人暮らしだし。なんだかんだと優しいし。でもその優しさを利用する事はできない。俺はカナタの親友だから。利用なんてできないし、その優しさにつけ込むなんてできるわけがない。

「それに俺ダチできたし」

『は？浮気かよてめえ』

「浮気ってそんなダーリン。私にはあなたしかいないのに」

『きめえ』

「…ちゃんとのってよ」

冗談なのに。そんな真面目にコメントされても俺だって困るって。あれだね、カナタは自分でネタ振っておいてそのまま放置する人だったね。少し離れたただけなのに忘れていたよ。そして毎回そのネタにのってしまふ俺の性格も。

『どんな』

主語も述語もないそんな言葉。訳せばどんなトモダチができたんだい、マイハニーって感じだろう。

「天体観測仲間だよ、ダーリン」

『ああ…そっちにいたのか。お前と同じ趣味の奴』

「見事にスルーするよねカナタって。そんなあなたが大好きですけど」

決してMなわけじゃない。ただ、カナタと付き合うにはこれくらいは我慢しなくちゃやってらんないって意味。カナタはSだ。魔王悪魔だけあって鬼畜だ。しかも無自覚なDS。なんてタチの悪い。アメとムチを使い分ける天才。

『まさか真夜中にそいつと二人でいちやこら星眺めてるわけじゃねえよな？』

「声が怖いですカナタさん。そんないちやこらって…そいつ男ですよ。それに天体観測って夜じゃないとできないし…。あ、そういえばカナタも俺に膝枕させてたけどさ、あれってどうなの？気持ちいいの？そいつに聞いたらなんか心地よいかわけわかんない返さる方したんだけど」

『……………』

「あれ？カナタ？」

『浮気発言確認。お前次会った時覚えてろよ』

「え？あの…え！？カナタ！？」

途絶えた通話。子機から流れてくる電子音。

「……………」

電源を切った子機を見つめながら、カナタの最後の言葉を頭の中で何度も何度もリピートする。しかしどんなにリピートしてみても、どんなに頭を柔らかくしてみても、同じ意味合いにしか取れない役立たずな脳みそ。

次会ったら覚えてろよ…ってあれ、殺人予告ですよ？俺、なんか怒らせるようなこと言ってたっけ…。

「こ…殺される…」

ワンテンポ遅れで現状を理解した俺の額に汗が滲む。サーツと血の気が引く。

あの記憶に新しいカナタのSっぷりが目に浮かぶようだった。

「うう…カナタのバカ…。なんで電話出てくれないんだよ…」

あの後何度も何度もかけなおしてみたが、カナタが電話に出る事はなく。しまいには電源を切られ、例の電波の届かない所にいるか…なんていう声が聞こえてきた。さすがに諦めるしかなかった俺は、日課を遂行すべく靴を履きただいまとぼとぼと夜道を歩いている。正直、カナタの怒りは早めに取り除かなければ後が心配で何も手に

付かない。かつてカナタと喧嘩したときはシカト続きの毎日で、結局俺が泣いて謝ってカナタが折れてくれたんだっけ。今回のとはまた違うが、とにかくカナタを怒らせたら厄介だ。伊達に中学で族デビューはしていないのだ。下手すればマジで冗談抜きに殴られる事もあるし、親友だからといって怒りの原因となる奴ならば容赦なくあいつは殴るだろう。いや、実際に殴られた事があるのだからこの言葉はおかしいのか。

「カナタ…」

今まで何度か喧嘩はしてきたけれど、その大抵は俺が何かしらやっちゃった時。あるいはカナタが機嫌悪い時に悪ふざけをした時。まあつまりは俺のせい。だから俺が素直に謝ればカナタは許してくれる事が多いんだけど、今回の場合はカナタが怒っている理由が分からないからして、謝る事も出来ない。しかも携帯の電源を切られてしまえばそれまで。以前までなら家に押しかけてでも喧嘩したその日に謝る俺だったが、今俺がいるのはカナタの家の隣にある一軒家ではない。ド田舎のどこらへんにあるかもわからないボロ家だ。築何十年経っているのかも分からないばあちゃん家だ。家に押しかけることも、謝る事もできやしない。どっちにしろ、謝る理由が分かっている俺には例え隣に住んでいたとしても為す術なんてないんだろうけど。

てくてくてくてく、夜道を歩く。カナタは俺がハジメと星を見ているという事実を知ってから一気に機嫌が悪くなった。…分からない。なんで怒るんだ？俺が天体観測が好きなのを一番理解しているのはカナタ、お前だろう。

どんなに頭をフル回転させてみても、いい案は浮かばず。諦め気味の俺はため息を吐き夜空を見上げた。あそこほどではないが、ここでも十分絶景だった。若干木々に邪魔されて見えない正座があるくらいで、夜空に散らばる光の粒はすばらしく、俺の心を癒してくれ

る。

それでも、気分は上がらない。

そりゃそうだ。喧嘩と言えるかも分からないが、今カナタは怒っているのだから。俺が原因で。距離が離れている分、不安になりやすいらしい。あの面倒見のいいカナタが遠く離れた土地に行ったからって俺を見捨てるのはとも思えないけれど、もしかしたら、なんて嫌な妄想が頭をぐるぐると回る。

ネガティブ思考なんてらしくもない。

やはり、慣れない環境のせいなんだろうか。

「……………」

いつもの場所。でも、いつもより少し遅めの時間。

それなのに、橋の上にはまだ誰かがいた。

誰とは聞かずとも分かる。あのガキ共の中でこんな真夜中に家を抜け出す不良少年なんてひとりしかいないのだ。

「まだいたのか」

「…悪いかよ」

「悪かねえけどな」

むしろ助かる。

このネガティブ思考はひとりだと勝手にあり得ない妄想をして自身を容赦なく追いつめていくらしいから。ひとりであるよりも、誰かといったほうが幾分か心は楽になる。

ハジメは最初の俺の声のかけ方が気に入らなかったのか、そっぽを向いて寝ころんでしまった。目があったのは一瞬だけ。いつもの無駄にテンションの高いハジメは、ここにはいなかった。

「なんかあったか？」

「別に」

「そのわりには、元気ないけど」

「ホントになにもないんだ。ただ…」

「ただ？」

「昼間のこと、考えてただけだよ」

昼間？昼間なにかあったつけ、と記憶を巡らしてみれば初めてみんなと水球やった事を思い出す。そういえばハジメに何か言っただんだけ。スポーツじゃないんだからうんぬんかんぬん。実はこれはカナタからの受け入りで。

まだ初等部だった頃、サッカー少年団に所属していた俺は、友人同士でやる遊びでさえも監督に言われたことをいちいち気にしながらプレイをしていた。楽しくなかった。みんなと遊んでいるのに、サッカーをしようなんて言われた時はその日の放課後が憂鬱になつてしまふ程度には。そんな俺を見かねたカナタが吐いた言葉。それは今でも俺の心の中に刻まれている。

『お前は不器用すぎんだよ。もつと気楽に遊べばいいだろ。これは試合じゃなくてゲームだ。ただの遊びであつて、お前が監督に何言われてかしらねえけど本気出してたら素人のあいつらがかわいそうだろ。今だけは、監督の言った事なんて忘れて遊んでろ』

ぐしゃぐしゃと頭を撫でたあの手は遠い記憶の中でもひどく温かくて。心地いいなんてものじゃない。安心する。

ああー、女々しい自分は嫌になるけどすっごいカナタに会いたい。毎日のように遊んでいたのに、突然こんな会えなくなるなんて嫌すぎる。カナタは夜トモダチはいたけれど、彼女なんてものはいなかったし、俺以上に仲のいい子なんていなかったからいつだって俺を優先してくれていた。優しい優しいカナタ。カナタだったら、今ハジメが悩んでる事もぴたりと当てて、簡単に悩みを解決しちゃうんだろうな。

「昼間のこと？いいんだよ別ににも考えなくても。明日実践してみればいいんだからさ」

「それが心配なんだよ……。だってやったことないんだぜ？お前は初めて学校の屋上から飛べって言われていきなりできるか？」

「……そんな恐ろしい挑戦じゃねえよ」

「俺にとつてはそんなくらい大変なわけ」

「大げさ大げさ。大丈夫だって！」

「何を根拠にそんな事が言えるんだよ」

根拠？

そんなもの、必要ないだろ。がむしゃらに遊ぶことのどこが難しい？ただ何も意識しないで遊べばいいだけだ。余計な事考えないで、体が勝手に動くままに行動すればいいだけだ。

「俺ができたんだ。ハジメにもできるよ」

「……お前が？」

「ん。俺も今のお前みたいだったのよ、若い時は」

「お前いくつだよ」

「まあまあ。俺小学生の時サッカークラブに入ってたんだけど、なんかいつも監督に言われたこと意識して友達と遊んでる時も試合みたいにプレイしてた。それ見てた親友にもっと体の力を抜けて言われたんだけどな。俺に出来てハジメに出来ねえはずねえよ、大丈夫だ」

「……………」

笑って言ったら、なぜだか驚いたような顔をされた。しばらくしてようやく反応が返ってきたと思えばその顔を真っ赤に染めていた。

「ハジメ……？」

「ばっ、バカじゃねえの！！よくそんな恥ずかしい事言えるんだよ

「!!」

「はあ？」

恥ずかしい事ってなんだよ。俺そんなこと言っただけだよ。なんて記憶を掘り返してみてもやはりそんな顔が真っ赤になるような恥ずかしい事は言っていない。それでもハジメは、これでもかというほどに顔を、あろうことが耳まで真っ赤にしてなぜか照れている。わけがわからない。つん、とそっぽを向いては俺の顔を見ようとしている。

木々のざわめきが大きくなる。風が強くなっていたようだ。

「そろそろ帰るか」

「は！？早くね？」

帰る、という言葉にすばやく反応したハジメが勢いよく振り返る。その勢いに少し驚きながらも、俺は苦笑い混じりに答えた。

「だって風強くなってきたし。そろそろいい時間だし」

「お前ここ来てからちよつとしか経ってねえじゃん。そういえばなんで遅かったんだよ」

「電話してたんだよ。友達と」

「…電話？」

「ああ」

「ふーん…」

今度はすねられた。

ちよつと前までは顔真っ赤になって照れていたくせに、今度は口をとがらせすねている。今更だが、本当にハジメはよく分からない。感情起伏が激しいのか、すばらしいくらいに表情もコロコロ変わる奴。

仕方がない。もうしばらくここにいろか。

なんですねているのかは分からないけど、どうやらハジメはもうちよつとここにいたいみたいだし、ご機嫌を取っておかないと明日がむしやらに遊ぶも何もなくなってしまう。

「明日ガンバレよー」

「…おー」

一応、頑張る気はあるみたいだ。
すねるハジメを隣に、俺は暢気に星を見上げ明日のことを考えていた。

…カナタの物騒なあのセリフを忘れて。

第4話

「こつちだー。こつちー!!」

「バカかてめえ敵チームだろおが!!」

「ちっ、バレたか」

「にやろう…」

ぽーんぽーん、とボールが次々にあれよあれよと回されていく。昨日とは違い、初めてチームをわけてみたからみんな最初は戸惑っていたみたいだけど、どうやら3ゲーム目にもなると慣れたようだ。今日も今日とて快晴。

サンサンと嫌味なくらいに射した日差しがじりじりと肌を焼いていく感触。川に入っているから暑くてたまらないわけではないが、もう少し控えめに照っていてくれるのもいいと思うのは俺だけだろうか。きつと俺なんだろうな、うん。だってみんな日差しなんて気にしないとも言つように水球に夢中になっている。ボールを回して、ゴールに投げて、それを阻止する手が伸びる。上がった水しぶきに目をかばえば、あつという間に目の前にあつたはずのボールは誰かの手に渡っていてしまった。

「トモさん!! ボーっとしてないでボール取って下さいよ!!」

「ごめんて。次はちゃんとするから」

「はっ、俺のチームが負けるわけあるかよ、いくらトモヤがいるからって」

「ハジメ…その言葉あとで後悔するぞ」

そして。

昨日あんなに悩んでいたのが嘘だったみたいに、ハジメは普通に楽

しんでいた。仲間と連携プレーを為して、すばらしい一致団結で俺たちのチームに立ちはだかつてくる。そんなハジメも加わったせい
か、昨日とは比にならないくらいの盛り上がりを見せていた水球は、
ゲームの展開が早すぎる。俺、正直ついていけない。

だがしかし、あそこまでハジメに宣言されてしまうと俺も黙ってや
られるわけにはいかないのだ。ボールを奪ったのがハジメだった
てのがすげえ悔しいし。

一度水に頭を突っ込んで、ゲームに集中する。昨日あれだけハジメ
にえらそうに言っておいて俺が集中しないでどうするよ。がむしゃ
らに遊ぶんだろ、何も考えず体を動かせ。そう言い聞かせて、ゲー
ムに参戦。ちょうど近くにいた奴にボールが回ってきたからそれを
奪うと俺は形勢逆転と言わんばかりにゴール近くにいた仲間にボ
ールを回した。

「さっすが、トモさん!!」

「トモさんひでえっすよ!!」

「ひどかない。これは勝負だろ」

今ので、ハジメももう少しやる気になったらしい。敵対心の視線が
ギラギラこちらに向いているのが分かる。こりやもう駄目だな。今
日も夕方くらいには体がボロボロになっているはず。まあそれはみ
んな…もちろんハジメを含めたみんなもだろうけど。

「ガンバレー!!」

ゲームに参加していないカヨを始めた女の子や小さな男の子が声援
を送ってくる。さすがにこの激しすぎるくらいの激しい水球に女子
供は参加はできないらしい。ケガすると危ないしね。が、しかし。
見えてこれ楽しいものなのだろうか。

少しそれが心配になって声援を送る子供達に視線を向けてみると、

誰も彼も笑顔だ。どうやら楽しいらしい。プレーしている友人に自分を重ねて見ているでもしているのだろうか。

ゲームが始まったのは俺が来てすぐ。家を出たのが午後十二時くらいだったから… いったい遊び初めてから何時間くらい遊んだのだろう。今の時間も全然分からない状態だ。一時頃、この場所に顔を出せば待つてましたとばかりの歓迎。腕を引っ張られ、背中を押され、やるんだろ？なんてハジメに言われれば断る事も出来なくて。

そろそろみんなの体力も限界に近づいてきたのか、さっきから動きが鈍い。もちろんそれは俺もだが、ハジメはまだまだ遊び足りないらしい。昨日は本気を出していなかったから… という理由だったが、元々基礎体力が高いらしく体力有り余るといった感じだ。まったくもって体力バカとしかいいようがない。でもやっぱり、昨日の提案は間違つてなかったんだと自負し、ひとり微笑む。

「… なに笑つてんだよ」

「いや別にー」

「気持ち悪い。おら、休憩だつてよ。お前ら体力なさすぎだろ」

ちょうど笑っていた所はハジメに見られてしまったらしく、苦笑いを浮かべてごまかした。なんだか少し照れくさそうにそっぽを向いて罵声を吐くあたり、昨日の事をまだ気にしているのか。それともまた違う理由なのか。ヤツ当たりにも見えなくはないその発言に、回りに否定の言葉が飛ぶ。

「ハジメがありすぎるんだよ！！」

「どんだけ体力あるんだよ！！」

「トモさんだつてバテてんじゃないか」

「おいこら待て！！誰がバテてるって？」

失敬な。確かに少し疲れはしたが昨日ほどへばってはいない。現に

今みんなのように座り込んではいないし、呼吸だってそんなに乱れてはいない。でもハジメはそれ以上に疲れた様子を見せていなかった。いったい普段どんな生活をしていればそんな体力がつくんだと尋ねてみたくなる。

カヨちゃんに飲み物をもらい、その手渡された水筒にそのまま口をつける。ん、と隣にいたハジメにそれを回せばなぜか渋い顔をされてしまった。

「…んだよ」

「…ちゃんとカップに移してから飲めよ」

とかなんとか言いつつも、ハジメもそのまま飲んでいる。人に言えた事か、なんて心の中で悪態付いているとカヨちゃんが妙に生き活きとした様子で身を乗り出してきた。

「さすがトモくんね！！ハジメちゃんのことうまく操縦するんだから」

「操縦？」

「こらカヨ。誰が操縦されてるって？」

「あら。だって現にさっき楽しそうに遊んでたじゃない。あんなハジメちゃん見たの初めてよ」

「…ふん」

「すねないすねない。いいことなんだから」

そっぽを向いたハジメをなだめるカヨを横目に、俺は小さく笑みを漏らした。兄妹じゃないのが信じられないくらいこいつらは仲がいい。まあ、なだめられているその姿を見ればどちらが年上か分かったもんじゃないけれど。

「トモヤ…お前今すっぱー失礼な事考えてただろ」

「気のせい気のせい」

「トモヤー!!」

「ほら、再開するつてよ。参加するんだろ？」

「当たり前だろ!!」

ふん、と息づくハジメを見て、俺とカヲは顔を見合わせて笑った。昨日のようなハジメよりも、やっぱり元気で明るいい、でも素直じゃないハジメを見る方が安心する。昨日は元気もなくて、水球も楽しそうではなくて、無駄に素直だったからな。言い返さなかったし。体力を取り戻したやつらが、早くさっきの続きをやらうと促してくる。ただ遊びに飢えてんだ、とため息もつきたくなったが俺はふっと笑った。中学生なんだから、このくらい元気があってもいいだろう。どちらかというと、俺たちが不健康な遊びをしていたんだから。家にこもって、外に出る事はなく四六時中テレビゲームに夢中になって。秘密基地なんてもんは小学生で卒業した。カナタはもうその頃からくだねえの一言で一蹴していたけれども。それでも無理矢理誘ってカナタと俺と二人だけの秘密基地を作ったのはいい思い出。なんであんなに楽しかったのに、この感覚を忘れてしまっていたんだろうか。

きつと、回りの環境が悪かったんだ。

東京にはこんな思い切り遊べる場所は少ない。公園に行ってもすでに誰かに占領されていたり、不良がたむろしていたり。秘密基地を建てていても、雨が降った次の日には壊れてしまっていたり。仕方ないから、という理由で結局テレビゲームに夢中になって、それが繰り返されて、いつからか秘密基地なんてもんの存在さえ忘れてしまっていた。

…懐かしい。

そういえば、あの頃カナタと子供なりに一生懸命作ったその秘密基地は、今はどうなっているのだろうか。

「……………」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。じゃ、参加してくる」

「行つてらっしゃい」

笑つて送り出してくれるカヨに笑顔で応える。

すでに先陣切つて川に飛び込んでしまっているハジメに習い、気持ちを無理矢理切り替えて川へと飛び込んだ。

…軽いホームシックに陥りそうになってしまった。

ホームシックって言つても、今の俺の家はここにあるんだが。

でも、俺が帰りたい家はここではない。

本気で、カナタに養つてもらおうかと考えていたところ、バシッと勢い付いたボールが俺の頭に直撃。犯人は誰だと疑う暇もなく、その飛んできたボールを掴むと、俺は力一杯そのボールをなげつけた。もちろん、ハジメに。

「ハジメーっ！！」

「ははっ、ばーつとしてんのが悪いんだよ！！」

その怒号を合図に、ゲームが始まる。

水しぶきが舞い、歓声が上がる。冗談であろう口汚い言葉が飛び交えば、そこはもう戦場のようだった。負けじと声を出し、敵チームに応戦。ちらりと見たハジメは、やっぱり楽しそうだった。仕方がない。

今更どうこう言つた所で、俺の帰る場所はまだあそこではなくなつてしまったんだ。あの地元にこだわる割には、カナタ以外会いたいと思えるダチはいないし、親父だつてもうあの街にはいないんだから。もちろん、イチだつて…。母親も今はここにいる。ばあちゃんだつてここにいる。ハジメだつて、カヨだつて、他のたくさんの友達がここではできた。

帰れない。帰っても意味がない。

それは分かっているのに、なんで俺は今でもあの街にこだわっているんだろうか。やはり思い出があるからか。なに、思い出なんてもん、こっちでだって作れる。そんな理由なら早々に諦めてしまえい。それだけではなんだ。

それだけではない…はずなのに、今の俺はそれがなんなのかが分からない。

「おらあ!!」

声上がる。

歓声がいっそう大きくなる。

楽しいのに、楽しくない。

ここを好きになったはずなのに、物足りない気がするのなぜか。ああ、だめだだめだ。いくら考えたって今の俺には分かりはしない。考えるだけ無駄ってもんだ。それに、どっちが楽しかったとか、誰と遊んでいた時の方が楽しかったとか、そんなの考えるだけ無駄だし相手に失礼ってもんだ。せつかくみんな楽しんでいるのに俺がそれをしらせさせてどうするよ。ハジメをやる気にさせた張本人だ。集中しろ集中。

「……………」

「ゴールだあ!!」

勝ち気取りの声が上がる。

俺が見えていないのか。させるかよ。

「逆転するぞあ!!」

「おーっ!!」

飛んできたボールをキャッチして、自分のゴール方へと大きく弧を描くように投げる。我ながらなかなかの飛距離だった。俺の本気を見た相手チームの覇気も上がり、味方チームのテンションも上がる。なにより、上がったのはハジメだろうが。

「逆転なんかさせるかよ!!」

現在の戦績は5 - 8。

巻き返せる可能性は十二分にある。

とりあえずやれるだけやってみようと、俺は一度頬を叩き気合いをいれるとボールがあるその方向へ泳いだ。

それから数時間後。

さすがに、キツかった。

日は落ちて、辺りは薄暗くなりつつある時間帯。いつもならば、すでにこの川には誰もいない時間であろうその時間、俺たち一同は屍累々という言葉がお似合いだった。というのも、未だに体力が回復せず岩場に体を預けて休憩中。さすがのハジメも息を切らして倒れ込んでしまっている。

「はっ、結局引き分けかよ…っ」

「引き分けばっかだな、俺たち」

「ばっか。あの喧嘩はお前の作戦勝ちだろ」

「へー。負けを認めるんだ」

「…次は負けねえよ」

確かにあれは俺の作戦通りだったけれど、ハジメが素直に負けを認めるのは意外で、正直驚いてしまった。

くん、と鼻をならしてハジメがだるそうな体を起こす。そろそろ帰

るか、なんてカヨに言うあたり、やっぱりこいつは子供達のリーダーとしていい素材だと思った。確かにそろそろ帰らなくては、ばあちゃんを作ってくれる夕飯が冷めてしまう。いつもならできる前には帰り着いているけれど、今日は遊びに熱中したせいで間に合わない事は分かり切っていた。

母さんに何か言われるだろうか。

…あまり期待はしていない。おしかりを期待するっていうのも変な話だが、あの抜け殻のようになってしまった母親があの状態でしかるとは考えにくい。

そんなことを思っていると、ハジメがぽつりと声を忍ばせて言った。

「今日は、天体観測中止だな」

「は？なんで」

「雨が降る」

「……………」

再びくん、と鼻を鳴らすその様はまるで犬みたいだった。野生の勘…いや、長年ここでの暮らしで自然と身に付いたものなんだろう。

雨が降った後のアスファルトが濡れたあの気持ち悪い臭いなら俺でも分かるが、さすがに降る前兆なんてものは分からない。ふと思いついたように空を見上げてみても雲はなくてただ薄暗くなっているだけの空が広がっていた。

さんさんと輝いていた太陽はいつの間に沈んだのか。あれだけ遊びに夢中になっていればそれは気づくはずもないわけで、俺は不意に陰った自身の場所から再び空を見上げた。

「ほら、早く帰らねえとびしょ濡れになるぞ」

「…まじかよ」

ゴロゴロと音をたてはじめる空。

慌てて子供達は帰り出す。
やばい、と思ったのも束の間、雲は大きな雨粒を降り注いだ。

ハジメの勘は大当たりだった。

雨が降った、という言葉では足りなくらいの大粒の雨が地面を叩く。古屋のこの家の雨漏りが少し心配になるほど。

「トモくん、早く食べてしまいなさい」

「ああ、うん。ありがとばあちゃん」

すでに母とばあちゃんは食べてしまった後らしく、テーブルの上には俺一人分だけの食事が並んでいた。遅くなってごめん、と軽く頭を下げ帰ってきた俺は突然振ってきた雨で全身びしょ濡れで、食事よりも先に風呂へと促されたのだ。

雨で冷えた体は風呂に入った事でほかほかに。遊びすぎて空腹感ばかりを感じていた腹は一人分にしては多すぎないかと思うほどの夕飯で満たされた。

いつものことだが、風呂に入り夕飯もすませてしまえば俺は手持ちぶさたになってしまう。とりあえず居間を出て、自室に戻ったはいがすることがない。

仕方なく、いつもよりも早い時間にカナタへと電話する事にした。

例えば会話が続かなくても、カナタはだるい面倒臭いの理由で俺との通話は切らない。俺からの話題を待つか、自分から話題を振っかけてくるかのどちらかだ。絶対に自分からは切らない。チーム関係でなにかごたごたがあった場合は別だけど。それでも後でかけなおしてくれるのは、カナタは俺に何かと甘いからだと思う。

すっかり俺の部屋が定位置となつてしまった子機を手取る。昼間はばあちゃんが充電していてくれるらしく、電池が足りないなんてことになつたことはない。

窓を叩く豪雨の音をBGMに俺はその番号を押した。

カナタの番号だけはしっかり頭にインプットされている。それはいつなにかあつた時のために、とカナタに抜き打ちで番号テストをさせられていたから。アイツは実の親よりも俺に過保護すぎる。

そんなカナタが大好きで、嬉しいと思つちやう俺もどうかと思うけど。

「…あれ？」

切のボタンを押して、再びその番号を押す。それを何度か繰り返して俺は首をひねつた。

「なんで…？」

つながらないのだ、1コールたりとも。

聞こえてくるのは女の人の声。電源を切っておられるか電波の届かない所に…の例のあれだった。

東京で電波がつかないって…まあ稀にあるけれども、それは本当に稀だ。滅多にない。そして、カナタが電源を切っているという可能性もかなり低い。そんなこと、かつて一度たりともなかったから。出ない事はたまにあつたとしても、カナタの携帯からこの声が聞こえた事は初めての事だ。なにかあつたのか…？

「……………」

呆然として手元の携帯に目を落とす。

こういう時、どうすればいいのか分からない。

前に住んでいたところならまだしも、今俺がいるのはド田舎だ。東京とは遠く離れた田舎だ。心配になっても、カナタが今どこで何をしているかなんて知る事も調べる事もできない。

雨が戸を叩く。

風が窓を揺らす。

ごろごろと鳴る空は薄暗く、今日は唯一の癒しである星も見えない。月も、星も、空も、路も、すべてがすべて闇に包まれて、それが一層不安にさせる。

嫌な想像を頭を振って追い払い、せめてこの闇が見えないようにとカーテンを閉めてゴロリと布団に寝転がった。

「カナタ……」

もしかしたら集会なのかもしれない。

知らぬ間に、電源が切れてしまったのかもしれない。

どうにかこうにかポジティブに考えようとしても、浮かんでくるのはボロボロになったカナタの姿。かつて一度だけ、その姿を見た事がある。今までカナタよりも強いヤツがいるなんて思わなかったから正直その姿を見て喧嘩でやられたというカナタの言葉が信じられなかった。小さい頃から拳法やら武術やら護身術やらに手を出していたカナタ。親友の俺が自慢した所で何もないが、とにかくその強さは素人でも分かるもの。普段の目つきも恐ろしいと距離を置かれているカナタだが、喧嘩の時のその目つきはそれの比にならない。でも俺はその一人しか知らない。

カナタが一度だけ負けたというそいつしか、カナタより強いヤツを

知らない。でも今は味方同士…というか同じチームだからそいつと戦うなんてことはないんだろうけど、それでも心配になるのは俺が親友バカだからだ。

カナタはとことん俺に過保護だけれども、俺も十分負けていない自身がある。

「交通事故とか…ないよな…？」

…シャレにならん。

カナタはバイクに乗っているし、無免許で。俺がどんなに止めると言っても聞いた試しはない。確かに下手な免許持っているやつよりもそのテクは惚れ惚れするほどだが、無免許には変わりないのだ。いつ事故を起こしていても不自然ではない。カナタだし。安全運転するヤツじゃないし。免許持っていて事故るやつは事故るし。そう、イチみたいに…。

「……………」

バカだ俺。

なんで今思い出したんだろう。

なんで今更、イチのことなんか思い出してしまったんだろう。

ただでさえ、カナタが今どこで何をしているか不安で仕方がないのに、まるでとどめを刺すかのようにイチのことを思い出してしまった。しばらく忘れる事ができていたのに。

俺にとってイチは、俺の精神安定剤のひとりだった。

ネガティブ思考な俺を支えてくれる中のひとりだった。でも死んだ。

亡くなったのは、つい最近の事だ。

「……………」

もう一度子機を手に取り、リダイヤルを押す。その声が聞こえてきては切を押して再びかける。
一体それを何回繰り返したんだろう。

気が付けば自室に戻ってから裕に二時間は経っていて、その事実が俺をまた愕然とさせた。

何度かけてもつながらない。

不安で仕方がない。

ついには幻聴さえも聞こえてくる始末。

「……………」

これは、バイクの音だろうか。

豪雨の音に混じるバイクの音はカナタの乗っていたバイクのエンジン音にとてもよく似ていた。交通事故の予兆か？笑えねえ………って。

「は！？」

思わず勢いつけて起きあがった。そのせいで激しい頭痛がした。

痛む頭をおさえて、かまわず俺は急いで玄関へと向かう。慌てたせいで廊下ですっ転ぶ。靴を履くのにかかる。

ええい、まどろっこしい！！

焦れて、かかとの部分を踏んだまま俺は勢いよく戸口をスライドさせて外へと飛び出した。

外は相変わらずの豪雨。風が髪をなびかせて視界を遮る。雨がせつかくあたたまった体を再び冷たくしていく。雷が鳴る。ぬかるんだ地面に靴がはまり、じわじわと泥水が浸透していくのが分かった。雨が容赦なく体を濡らす。服がべつとりと体に張り付く。光が見える。人影が見える。

あれは…。

「ありえねえ……」

けたたましい豪雨の音に消え入りそうなその声は、しっかりと俺の耳に届いた。電話越しではないその声。俺よりも低くて、いつもだるそうで、それでも発する言葉は優しいその声。

ヘルメットを取ったその横顔は、闇に消えてもおかしくはないのに、俺の目にはしっかりとカナタの表情を写し込んだ。

第5話

「カ、ナタ…？」

なぜ？どうして？なんで？

動揺しすぎて頭の中がぐちゃぐちゃになった。

確かに夏休み中に会いに来てくれるとは言ったけれども、どうせ八月の中盤くらいだろうと、まだまだ先の話なんだろうなと思っていた。どちらにしても、急に来るとは思っていなかったのだ。何かしら電話で伝えてくるだろうと勝手に決めつけていた。でもああ、そうだ忘れていた。カナタはなにか行動を起こす前に報告するのではなく、事後報告主義だった。

「びしょびしょ…急に降り出すなよこの野郎。…あ」
「……………」

不機嫌そうに呟いた声の主と不意に目が合う。

カナタはなぜか悪戯がバレてしまったような子供のような気まずい顔をして俺をしばらく見つめると、濡れたヘルメットをその手にかかえ、バイクをそのまま突然足早に歩み寄ってきた。

「…行くぞ」

「か、カナタ!？」

ぐいつと腕をひかれてそのまま家の中へと連行される。玄関や廊下や部屋が濡れるのなんてまったく気にしていないようで、躊躇いもなくその足は居間へと直行。ヘルメットだけは玄関に置いた。バイクに乗っていたからなのか、突然の雨のせいなのか、握られたカナ

タの掌は冷たくて徐々に俺の手まで冷たくなっていくのが分かった。ガラリと引き戸をスライドさせる。

突然の訪問者に、ふたりが驚くのも無理はなかった。

一体何がしたいのか。カナタが何を考えているかなんて分かった事はないけれど、それでも何を考えているのかと疑問に思うのは当然の事で。手を引かれるままに居間に来たはいいいけれども、カナタはなんのためにわざわざ居間へと直行したのだろう。そのまま俺の部屋に行くか、風呂に行けばいい。冷たくなってしまった体を温めて欲しい。俺のわがままのせいでカナタが風邪をひくなんて嫌だ。俺が原因でカナタが弱っている所なんか見たくない。

母さんとはあちゃんに挨拶でもする気なんだろうか。

否、そんな律儀な性格ではないことくらい俺が一番知っている。

「…サキねえ」

カナタの視線が母に定まった。

なぜかは知らないけれどカナタは母さんの事をサキねえと呼ぶ。若い時の母を知っているからか、子供の頃の呼び方がそのまま延長されているのか。同学年の友人達が呼ぶようにおばさん、なんて呼んだ所を見た事がない。だからきつとこれが自然体なんだろう。

突如名前を呼ばれた母さんは虚ろなその目を見開いてカナタを見つめている。その瞳には光がない。以前の、いい年して好奇心旺盛だった母の面影はない。それでも、そんな母の姿を見てもカナタは怯みもせずにその言葉を言い放った。

「あんまコイツのこと泣かせないでよ」

くいつと親指で指されたのは俺で、そこで初めて自身の瞳から涙がこぼれている事を知った。頬を伝う雫は雨だと思っていた。指摘されてしまえば、もうその涙は止まらなくなる。

そんな俺をちらりと見たカナタはまた仏頂面で「行くぞ」と言うと再び俺の手を引いて歩き始めた。涙を隠すために俯いたせいで、母さん達の顔を見る余裕なんてもんはなかった。向かったのは風呂。

なんでカナタがこんなにもこの家の造りに詳しいのかと思えば、考えるまでもない。以前…といつてもかなり幼い頃だがカナタもここに來た事があつたのだ。長期休暇。俺がカナタと一緒にじゃないとばあちゃん家に行かないと泣きじゃくつたことの結果だった。両親は多忙のため、昼間に誰もいない家に幼い俺をひとり置いておくこともできず、仕方なくといった感じでカナタの両親に許可を取り、カナタを同伴させた。遠い遠い思い出。それでも、楽しくて仕方なかった一度きりの夏休み。

思い出は薄れていくものだ。

楽しくて仕方がなかったはずの思い出でも、薄れてしまうものだ。そうだと分かっているのに、カナタとの思い出を今の今まで忘れていた自分に腹が立つ。

「…トモヤ。ぼーっとしてねえでさっさと脱げ。お前も体冷たくなってる」

「……………」

「後で思う存分泣かしてやるから、今は泣くな」

カナタさん、その言い方…ちょっとエロいです。

きっとそう思う俺の方がエロいんだろうけど。思春期なのだから仕方ないとひとり心の中で頷く。というか、心はこんなにも落ち着いたっていうのに涙が止まらないのはなぜだ。

悶々とそんなことを考えながらだらだら服を脱いでいると、痺れを切らしたカナタがバツと俺の服を脱がした。そしてそのまま風呂場へと引っ張り込まれる。

ここでもカナタのやりたい放題。

俺をイスに座らせては何の合図もなく突然頭にお湯をかけてきた。どうやら髪を洗ってくれるらしい。案の定、不意にカナタの手が頭に触れて少しびっくりする。わしゃわしゃと、がむしゃらに泡立てられていくそれを頭皮で感じ、俺はというとされるがままの状態でありあえず目に泡が入ってしまったぬよう強く目を閉じた。

泡を流され、体も洗われて、あれよあれよと俺は今現在浴槽につかっている。

カナタはようやく自分の体を洗い始めた。俺とは違い、手際よく洗うその手つきをばーっとしながら見てみると、突然頭を小突かれる。あまり見るな、とそういう意味ですね。ごめんなさい。

お湯が揺れる。

カナタが浴槽に入ったのだ。

「……………」

「……………」

沈黙だけが落ちるその空気。

別に気まずい訳じゃない。これが俺たちの普段のスタイルだから。

無言の空間。心地よい雰囲気。

向かい合わせに座るカナタはようやく体が温かくなったようで少しだけ頬が上気していた。漆黒の前髪から雫が滴り落ちるのが、変に絵になっている。

堂々と足をのばしているカナタに対して俺は小さく体育座り。無表情なカナタに対して俺はきつと今情けない顔をしている。身長の高いカナタに対して俺はチビで、程よく筋肉がついた引き締まった体に対して、俺は貧弱な体だ。

なにもかもが違う。

カナタは俺の親友だけれども、同時に俺の憧れでもあった。羨んだりはしない。ただ、自分とは違うものを持っているカナタを自慢に思う。これが俺の親友なんだぞ、と誇らしく思う。もしもカナタが

もつと嫌な性格をしていたならば俺は羨んでいたのかもしれない。
憧れて、羨んで、自分もこうなろうと少しは努力していたかもしれない。

でも幸運か不幸か、カナタはいいやつだった。

生まれた時から隣に住んでいて、物心つくまえから一緒にいて、成長した今もそれは変わらない。

カナタはこんな俺が親友でいいんだろうか、と時々卑屈になることがある。でもそれは、勘良く俺の思いを感じ取ったカナタが「バカじゃねえの」と頭を叩かれる事でそんな思いは綺麗さっぱりなくなるのだ。

違うから一緒にいる。正反対だからその隣が心地いい。

そんな関係だ、俺たちは。

もしかしたら、世に言う親友と比べれば異常なのかもしれない。それでも、これが俺たちのスタイルだった。

「…上がるぞ」

「あ、うん」

疑問系ではなく命令形。

優柔不断な俺には、カナタみたいな存在が近くにいる事が丁度いい。でもきつとそれは、カナタだから。カナタがカナタだったから、俺は今そんなことを思えるんだと思う。

体まで拭かれて、服まで着せられて。正直ここまでくると妙に気恥ずかしくなってくる。…非常に今更だが。

そして、うむを言わず手を引かれて部屋に直行する。

俺の意見なんか聞かない。それがカナタ流。

部屋までの距離が縮まっていくごとに、なんだか掴む握力まで強くなっているような気がした。しかもそれは気のせいなんかじゃなかったらしく、ガラリと部屋の扉が開けられ入った瞬間に俺の腕はぐいっと引き寄せられて、唇がカナタの肩に触れた。

鼻腔に届いた懐かしい香り、背中と腰に回された力強い腕。

ああ、なんで…。

せっかく引っ込んだ涙だったのに。

「カナタ…」

「ん」

「バカ…」

「ぶん殴るぞてめえ」

「カナタ」

「んだよ」

「…大好き」

そう言ったら、ふっと笑う声が聞こえた。

「……知ってる」

耳をくすぐる低音ボイス。折れそうなくらい力強く抱きしめてくるカナタの背中に、自身の腕を伸ばす。

鼻の奥がツンとした。自然と唇が震えた。何度も何度もカナタの名前を呼んで、そのたびに応えてくるその声がただ嬉しくて、涙混じりのみつともない声でまた呼んだ。回した腕に力を込めて、その体を引き寄せる。もうこれ以上引き寄せる事などできないのに、もつともつとと、力を込める。

「愛してるぜ、トモヤ」

ああ畜生。大好きだ。

甘い甘いセリフ。もちろん冗談だということは分かっている。でももしもこの先彼女でできなかったら最終的にカナタの嫁になると本気で考えた。顔良し性格良し経済力良しのカナタ。きっと嫌な顔す

ることなく俺を養ってくれるだろう。

そんなことを考えていると、不意に体がふわりと浮いた。え？え？と混乱している俺に構わずカナタはそのまま俺を抱き上げると布団の上に下ろし、そしてそのまま自分も寝転がった。

「…カナタ？」

「疲れたから寝る」

「……………」

横になつてもなお、しっかりと俺を抱きしめてくれる。

さすがのカナタも長距離をバイクはキツかったんだろう。顔色を伺えば確かに疲れたような顔をしていた。自分の事ばかりで気づかなかったけど。うーん、親友失格じゃね？これ。

「おつかれ、カナタ」

「ああ」

「すんげー嬉しかった」

「そうかよ」

「うん、そう…」

「……………」

「おやすみ、カナタ」

さすがにこれ以上起こしとくのは酷だろう。

それに、カナタの体温のせいかな俺もそろそろ眠い。気温は高いはずなのに、不思議とカナタの温もりが心地よく感じた。うつらうつらし始めてきた瞳を素直に閉じて感じる体温と呼吸音を子守歌に、意識を遠ざかせていった。

「おやすみ…トモヤ」

最後に聞こえたのは、そんな声。

真夏のカンカン照り太陽の真下。

本日過去最高気温記録。

そんな言葉を、ここ数年で一体何度聞いてきた事か。

「あち…」

青い空をおもむろに見上げて眩しい日差しを全身に浴びる。目を細めて腕を上げて陰にして、うっとおしく鳴く蝉を恨めしげに睨んだ。俺は今走っていた。

必死に、全速力で。

待たすわけにはいかないから。誰をつて、どちらも。

こちらに越してきてからというものの、俺は早寝早起きの習慣が身に付いていた。天体観測から帰ってこれは早すぎ遅すぎの丁度いい時間くらいで、他にやることもなく仕方ないからと布団に横になるしかないのだ。そうすれば自然と朝も早く目覚めてしまうわけで、そのはずなのに。

そうだったはずなのに。

今朝目が覚めていつものように何時かとの設定もされていない目覚まし時計に目を向けてみれば思わず目を疑った。目が、脳が、俺

自身がどうにかしていなければその時の時刻は十二時前を指していた。まさかまだ夜なのかとカーテンを開けてみれば眩しい光が部屋に差し込んでくる。つまり、真っ昼間で間違いなという事で。寝ぼけていたはずの頭もその衝撃でやけにスツキリしていた。昨夜は別にカナタが来たからと言って夜更かししたわけではない。むしろ、カナタが来た事によっていつもよりも早く眠りについたくらいだ。それなのに、いつもより早く起きるところかいつもよりもかなり遅く起きてしまった。

カナタは未だにぐうぐう気持ちよさそうに寝ている。どうやら、早寝早起きの習慣はただ単に慣れない環境のせいで、昨夜は久々に隣に在る人肌で安心したのか寝過ぎてしまったようだ。そして気が付いた。普段の俺がこの時間何をしているのか。

「絶対何か言われる…」

川で待つているだろうハジメたちもだが、書き置きだけして家に置いてきてしまったカナタにもだ。すぐに戻る、とだけ書いた紙。帰ってからのカナタの説教がひどく恐ろしい。

想像して、背筋が凍った。こうしてはいられないと速度を落としていた足を動かす。暑さなんて構っていられない。走って走って、とにかく走る。一刻も早くハジメたちに会ってしばらく来れないという事を伝えなければならない。いくら新入りだからといって、一応毎日来ていた俺を心配しないなんて薄情なヤツらではないのだ。きつと探す。下手したら家まで押しかけられてしまう。あの人数で来られたらたまったもんじゃない。しかも今家にはカナタがいるのだ。かれこれ三十分くらいは走っただろうか。ようやくあの開けた道に出て、水の音も聞こえてきた。それに加えて子供達のはしゃぐような声も。どうやら昨日に引き続き水球をやっているらしい。ハジメはちゃんと参加しているのだろうか。まさかとは思うが、俺がいないことを理由に橋の上でサボっていたりして。…ありえる。

生い茂った草木をかき分け、やつとの思いでたどり着いたそこは、いつものごとく賑やかだった。

「トモさん!!」

「トモヤ!? てめー遅いんだよ!!」

俺に気づいたひとりが声をあげれば一斉に視線が俺に集められる。マサキの声に続き様々な声があがるが、真っ先に俺の前へとやってきたのはハジメだった。

「…いつもより遅かったな」

「わりい」

「いいよ、別に。ほら、早く」

またいつものごとく手を引かれる。向かうのはきつと橋の上。俺が来て、ハジメが手を引いて、膝枕を所望されるのは日常と化していたが。

残念な事に今日は無理なのだ。今日の俺はここに遊びに来たわけではなくしばらく来れない事を報告に來ただけなのだ。なぜなら先ほども述べたように今家にはカナタが来ている。カナタをほったらかしで俺が遊びに来れるわけもなく、だからと言ってカナタをこちらに連れてくるのにもなんだか気が引けてしまうのだ。俺が初めてこいつらと出会った時、ハジメには敵対心を、回りにいた奴らからは警戒心を感じた。彼らのテリトリーに入った余所者には容赦しない。実際ハジメは俺の言葉をきっかけに殴りかかってきたのだから。彼らの大事にしているテリトリーを汚したくないわけではない。相手はカナタだ。カナタならそんな無粋なことはしない。ここに連れてくる事に躊躇いはないのだが。

「ハジメ、ちょっといいか？」

「あ？なんだよ」

問題はコイツだ。

喧嘩っ早いのは初日に確認済み。強いのも分かっている。だが俺と五分五分なくらいじゃカナタには絶対勝てない。しかしハジメのプライドは高く、そう簡単に負けを認める事はないだろう。もしもハジメが、負け惜しみにカナタの気に触るような事を言ったら？乱闘は免れない。一度暴走したカナタを止められる自信なんて俺にだってないのだからアイツらが入ってきた所で止められるわけもないだろう。

そしたら俺はここに顔を出せなくなる。カナタがずっとここにいられるわけではない。カナタが帰ったら、そしたら俺はまたひとりになっちまう。

そんなのは、嫌だ。

この先、ずっとここで暮らしていかなきゃいけないのに、ひとりには辛い。

「俺、しばらくここ来れないから。今日も、もう帰らなくちゃいけない」

「は？なんだよそれ、なんで？」

「まあ、いろいろあって…。一週間後くらいには絶対戻ってきてると思うから」

「や、違くて。なんでいきなり？昨日は何も言ってなかっただろ？」

昨日いきなりだったんだから仕方ないだろ…。

俺だっけいきなり来るとは思わなかったさ。でも正直助かった、というのが本音。俺はいろいろため込んでしまっていたらしく、昨日よりは全然気分が楽になっている。…気がする。この後の説教を考えると全然気分は乗らないけれど。

「昨日別れてからなんかあったのか？」

「んー…、まあ何かあったといえばあったのかもしれないけど何もなかった」

「どっちだよ」

「大したことじゃないって事。というわけで、俺帰るから」

「ごめん、と合掌して頭を軽く下げた後俺は身を翻し、帰ろうとしたが。

「トモヤったら水くさいな！。俺の事紹介してくんないの？」

心臓が飛び出るかと思った。

「……………」

「……………誰？」

身を翻した瞬間首に腕を回された。振り向いた瞬間に視界いっぱいカナタの顔がドアップで映っていた。驚愕して、言葉も出なくて心臓がバクバクとうるさくて、体が動かなくなった。なんだこれ。なんのドッキリだこれ。

「ん？おーい、トモヤー？起きろー」

「……………」

「…起きねえとこいつらの前でちゅーすっぞ」

「へ？あ。…は？かつ…カナタ！？なんでいんだよ！！」

カナタならば本気でやりかねないその脅しのような発言に俺の意識はようやつと浮上し、その視界にカナタを確認した。カナタはニヤリと笑みを浮かべて、そこに立っていた。どうしてなんでここに？

昨日、雨の中に佇むカナタを見た時と同じ言葉が頭に浮かび、消える。考えればすぐに分かった。きっと、たぶん、俺が部屋で着替えている時にでも目を覚まし、声もかけずに外へと出て行った俺の後ろをこっそりつけてきたのだろう。それにしてもつけられていることにも気づかなかつた俺って…。

「なんでってつけてきたに決まってるだろ」

「だからなんで！」

「家を出る時の態度があまりに拳動不審で気に入らなかったから」
「そんな…理由で……」

がくりと肩を落とす。

相手はカナタだ。こんなことで落ち込んでたんじゃあこの先やってけないってもんだ。

こそこそしながら準備して出てきた自分がバカみたいだ。こんなことになるんだったら余計な事考えないで最初からカナタも連れてこれれば良かったな、と今更ながらに後悔する。俺と一緒に来た方がまだ警戒心を持たれなくて済んだ。

「おいトモヤ。こいつ誰だよ」

「あー…、うん。…友達」

「俺とお前の関係を友達の一言で片付けるなんてな。躰が足りなかったようだ」

「俺の親友様です!!」

しかも、だ。

カナタは威嚇するハジメを見て明らかに楽しんでいる。他人をからかって遊ぶ癖は未だに直っていない。というか、本人にその自覚がないのだから始末が悪い。そしていつもとばつちりを受けるのは俺なのだから、いい加減やめて欲しい。いや、やめるなんて贅沢言わ

ないからせめて自覚して欲しいってもんだ。

「…親友？」

「ああ、うん。自分でもなんでか分からないんだけど」

「ふーん…」

ほらな。

なぜかは分からないが一気に不機嫌面になったハジメが俺から目をそらすようにそっぽを向いてしまった。どうしようかとわたわたりしている俺に対して、カナタはというとにやにや笑いながらハジメを観察している。カナタの趣味をどうこう言えた立場ではないけれど、人間観察をするならもうちょっと、せめて俺に迷惑がかからない程度にこっそりやってほしいものだ。そんなことを思いながらカナタを睨んでいると、視線に気づいたのかカナタは一度こちらへ視線を向けるとにつこり微笑んだ。

機嫌が良い時の笑みではない。

何を考えているのか分からない、それでいて厄介な考えしか持っていない時のその笑みに俺の背筋は凍る。

「トモ」

「…はい」

「しばらくここにこないつつってたよな？なんでだよ」

「なんでって…。カナタが家にいるからでしょ」

決まってるじゃないか。

大体、俺はここにカナタを連れてくるつもりはこれっぽっちもなかったんだっつーの。

俺がその言葉を言った瞬間に、気のせいか視界の端でハジメの肩がぴくりと動いたような気がした。見てみれば複雑そうな顔がこちらに向けられている。

「じゃ、それ取り消しな」
「は？」

そう声を上げたのは俺だけではない。

突然何を言い出すのかと眉を寄せたのはハジメも同じだった。

「俺もここに遊びに来るから」

「はあ！？」

「んだ、こら。文句あんのか」

「ありません。ありませんから腕を離して下さい！！」

後ろから羽交い締めされ、身動きが取れなくなる俺を余所に、カナタはハジメの顔をかがむようにして覗き込むと、まるで悪魔のような言葉を囁いた？

「文句ないよな？ぼうず」

そんな強面の男に言われれば小柄なハジメが断るわけもなく。
ああ、とハジメは小さく返事をした。

第6話

俺たちにとつてはこれが普通で、これが日常で。

こんな日常がなくなるなんて思えない。思いたくもない。

幸せは、なくしてから気づくものだ、どこかの誰かが言っていたけれど俺はちゃんと分かっているから。これが、これ以上ない幸せだって。決してなくしてはいけないものだって。

以前何気なくそんな話をした時、カナタは照れくさそうに、でも嬉しそうに笑って俺の頭を小突いた。

「トモさーん！！今日は参加しないんですかー？」

「ん、ごめんな」

橋の下、川で遊んでいたヤツらが俺を当然のように誘ってきたが、あいにく今日は参加する気はない。疲れているわけでも、遊びたくない気分というわけでもないけれど、今日は初めてこの場所に顔を出したカナタの隣にいないといけないような気がしたんだ。

性格から言つて、初めて来る場所でも初めて会う面子の中でも、カナタは飄々としている。というか、堂々としている。まるでそこは自分が前からいた席だとしても主張するかのよう。そんな偉そうな態度は決して相手を気遣わず自己中心的に考えているわけではない。それがカナタなりの気遣いだった。俺だって、初めて会うヤツに恐縮されていてもこちらまで気を遣ってしまうだけで、あまりその遠慮の仕方は好ましく思わない。

まあ、逆にこちらが恐縮してしまうくらいに堂々しすぎるのもどうかと思うけれど。

「トモくん」

「んー？」

名前を呼ばれて振り返ってみれば、思った通りそこにはツインテールを揺らしたカヨの姿があつて、俺はにっこり笑顔で対応する。テレビで見る下手な子役よりも可愛い容姿を持った彼女は、この子供たちのリーダー的存在であるハジメを唯一なだめる事ができる強者だ。そんな彼女は、先ほどからチラチラと俺の隣にいるカナタの存在を気にしている。やはり新入りは気になってしまふ者なんだろう。俺の時とは違ってカナタの場合、自らここに来たわけではなく俺が連れてきてしまったようなものだから話しかけにくいのかもしれない。

俯いてチラチラとカナタを覗き見るそのおどおどとした態度は、非常にかわいらしい。こんなことを思うのもおかしいのかもしれないけれど、カヨもやはり俺たちと同じ子供だということだ。

「あのね…」

「なに？」

「えっと…」

なにかを言いたいらしいカヨは、どうにか頭の中にある言葉を要約しようと悪戦苦闘しているらしい。そしてそんな状態にある女の子を放っておくほどカナタもモテないやつじゃないのだ。案の定、俺の隣に寝転がっていたカナタはよいしょと体を起こし、俺を挟んでカヨに目を向けた。その表情は久々に見る、女たらし並の笑顔。

「名前は？」

「え？」

「名前」

「え、あ…えっと…」

突然話しかけられ戸惑うその姿は非常に愛らしく、そう思っているのは俺だけじゃなかったようで、そんな力ヨのあたふたする姿に力ナタはおかしそうに喉をクツクツと鳴らした。不本意だと言わんばかりに真っ赤になって唇を尖らせる力ヨの頭を撫でると、そのすねてしまった女の子の変わりに俺は名前を名乗った。俺は力ヨのフルネームを知らないけれど、みんなに呼ばれている愛称でいいだろう。力ヨだよ、と教えると力ナタは笑うのを止めると俺に習うように力ヨの頭を撫でる。

「よろしくな、力ヨ。俺は力ナタ。トモヤの友達」

「力ナタ…力ナ、ちゃん？」

「ぶふっ！！」

力ヨ流の、かわいらしいあだ名。それを聞いた瞬間、思わず吹き出してしまったのは俺だった。突然力ナちゃんとかわいく呼ばれた力ナタはというと、非常に複雑そうに苦笑いを浮かべている。そして笑っていた俺に制裁とばかりにエルボーを放ってきた。

なるほどトモくんというあだ名が全然まともに聞こえる。力ヨ自身にとってはそれが普通なんだろうが、俺たち男にとつてちゃん付けはかなり恥ずかしいものだ。

「ふっ…く、よ、よかったなハジメ。お前と同類ができたぞ」

「あ？同類？」

「ハジメちゃんに力ナちゃん。どっちもちゃん付けだ」

「……………」

クツクツと笑う俺に複雑そうな視線を向けてくるハジメは甚だ不本意だと言わんばかりにふんつと鼻をならした。

只今、俺の右隣にはハジメ、左隣には力ナタ、そしてその向かいには力ヨが座っている。どうしてもハジメは力ナタと仲良くなるつも

りは毛頭ないらしくずっと仏頂面で頼杖をついていた。そんな話しかけんなオーラを放っているハジメに、カナタから話しかける雰囲気は一切ない。サバサバした性格のカナタは懐いてくる猫は素直に頭を撫でるけれども、懐かない猫には視線すら向けないような性格をしているから。まさに来る者拒まず、去る者追わずだ。たまに良からぬ計画を抱いてカナタに近づいてくる輩も以前はちらほらと見かけたけれども、人間観察を趣味とするカナタは見極める力が長けているため、そういうやつらに限っては懐いてきても無視を決め込む。

ハジメは後者ではなく前者だ。懐かない猫。

俺の時は天体観測が共通の趣味を持っていたとは言え、ここまで態度もひどくなかったように思えるが…なんだろう。根本的に性格が合わないのだろうか。カナタには何を言ってもそちらから握手を求めて交流を深めるなんて事は絶対にならないだろう。大体、カナタは俺ごときの言葉で己のあり方を変えてしまうような簡単な性格はしていない。となれば、どうしてもこの二人に仲良くなってもらいたいのであれば、説得するべきなのはきつとツンケンしているハジメだ。

「なあ、ハジメ」

「なんだよ」

「カナタのこと、嫌いなのか？」

「…別に。嫌いじゃねえけどなんか気に入くわねえ」

「なんで？新入りだから？」

「そんな理由じゃねえよ。大体、新入りだったら数日前のお前と変わりねえじゃねえか。むしろ一人で乗り込んできたお前の方が状況的に無理だつて」

「じゃあなんでだよ」

「そんなのお前が…っ」

そこまで言って、ハジメは言葉を止め、唇をぐつと噛みしめて黙り

込んでしまった。

カナタを気に入らないと言ったハジメ。俺が…？俺が、なんだ。ハジメがカナタと仲良くなならない原因は俺にあるのか？

理解しようにも情報が足りなさすぎる今の現状で、俺がどうこう動いても無駄なように感じてしまう。ハジメがカナタを毛嫌いする原因が分からなければ、改善しようにも分らないからできないのだ。一応、今の俺の友人であるハジメと親友であるカナタと互いが仲良くならないのは困る。何が困るって、そんな間に挟まれた俺の肩身が狭くなってしまうから。親友だからといってカナタを優先してしまえば、ハジメはいじめてしまうだろう。だからといってハジメを優先してしまえば長年積み上げてきたこの関係にヒビが入ってしまうので恐い。そんなことでカナタの態度が変わる事はないだろうが、これまで何よりもカナタとの時間を大切にしてきた俺にしては、難しい事だ。

思わずうつん、と唸り考え込んでしまう。そんな俺に気づいたカヨがまた何かを言いたそうにしているが、今回はカヨに頼るわけにはいかない。きっと、カヨでもこれは無理だ。

「トモ」

「うつわっ！？」

「なーに考え込んでるんだよ」

突然、肩を組まれてぐいつとカナタの方に引き寄せられる。バランスを崩してしまえばドタツと倒れてしまうものの、頭は丁度カナタの膝の上で衝撃はなかった。見上げた先にあった爽やかな笑顔。その表情に嫌悪を抱く者はないだろうと思ってしまっくらいに、今のカナタは機嫌が良い。例えばカヨにちゃん付けで呼ばれてしまったとしても、子供だから仕方ないかと流せるくらいに。

機嫌の悪いカナタが嫌いなわけではないけれど、機嫌の良いカナタは好きだ。父親みたいにその優しげな眼差しを向けられると安心す

る。

機嫌が良いのは俺に会えたからか。そんな自意識過剰なことを考えてしまうくらいに俺も今は機嫌が良い。そんな気分も、カナタが帰ってしまう時の事を考えてしまえば一気に急降下してしまうのだが、でももしかしたら、機嫌が良いらしい今のカナタなら、ハジメと仲良くしてくれるんじゃないかと思った。

「なあ、カナタ」

「ん？」

見上げて、その頬に、髪の毛に手を伸ばしてくるくと指先で遊んでみる。

よし、怒らない。

「ハジメと仲良くなる気はないの？」

その言葉を放った途端、くるくると髪を弄んでいた俺の指がぴたりと止まる。

失敗したと思った。

それは朗らかだったその表情から笑顔が消えたから。一瞬にしてそれは無表情に変わったから。でも怒っている様子はない。ただ、その顔から表情が消えただけ。

感情の見えないその表情で、その口で、カナタは小さく呟く。

「……分かってんだろ？」

「なにを」

「仲良くする気がないのはアイツだけ。俺がどんな性格か、分かっ
てて聞いているのか？」

「…分かってるけど…」

無表情で見下ろされる。感情のない視線が向けられる。

恐くはない。恐くはないけれど、思わずその視線から目を背けたくなるのはなぜだ。後ろめたい事があるわけでもないのに、そう思ってしまうのはなぜだ。それは長年、考えても考えても答えが出ない延々の自問だった。

「……………」

仲良くする気がないのはアイツだけ。

そう言うカナタだけれど、カナタにもそういう気持ちがないように感じているのは俺だけなんだろうか。ハジメだけでなく、カナタもハジメを拒絶するような動向がちらほら見え隠れしているような気がするのとはただの勘違いなんだろうか。今までにそんなことなかったから、本当にハジメを拒絶しているのかどうかは分からないけど、あまり友好的ではない。カヨには普通だったのに、なんで…？
膝を抱えて、俯く。

幼なじみなのに、親友なのに、俺はカナタのことが全然分からない。誰よりも一緒にいると自信持って言えるのに、誰よりもカナタのことを知っているかと問われると言葉に詰まってしまう。親友の俺でも思っくらい、カナタは難しい性格をしている。たまに素直に甘えてくる事もあれば、本当に同年かと思ってしまうくらい頼りになる事もある。ドロドロに溶けてしまいそうなくらい優しい時もある。身震いしてしまうほど恐いと感じる事もある。俺はカナタを親友だと言う。カナタも俺を親友だと言う。カナタは俺の事ならなんでも分かれると豪語するくらい俺の事を俺以上に理解している。俺はカナタの事が未だに分からずにいる。

一体この差はなんだ。

幼なじみで親友なのに、この差はなんなんだ。

今更だけど…非常に今更だけど、なんか悔しい。

「…分かったよ」

「は？なにが？」

「仲良くすればいいんだろ、仲良くすれば。だからそんな顔すんな」

ガシガシと髪の毛を乱されて、困ったようにため息をつかれた。

そんな顔って…俺は今どんな顔をしていたんだ。

気になる所だが、あえて何も聞かないでおく。なんか都合良く勘違いしてくれたいだし、せっかく仲良くしてくれると言ってくれているカナタを止める必要なんてない。むしろ止めないべきだ。

どうするのかとカナタを見上げてみれば、面倒くさそうにのそのそと立ち上がり、その足でハジメの前に立った。ハジメはシカトしようとはかりに顔をそむけてはカナタと目を合わせようもしない。

そんなハジメの態度に一瞬眉間に皺を寄せたカナタだったが、次の瞬間には滅多にお目にかかれない愛想笑いを浮かべ座るハジメと視線を合わせるようにしてしゃがみ込む。

さすがにじっと見られてしまえば気になってしまふのか、ちらりとハジメがカナタに目を向けたその時、カナタが言葉を発した。

「いつまでも嫉妬してんじゃねえよガキが。好きな奴のダチにすら嫉妬するガキかてめえは」

「……………」

「……………は？」

そんなカナタのとても友好的とは思えない言葉に声を上げたのは俺だった。突然吐かれた声はとんでもない暴言を発し、あるうことかその指はハジメの頬をつまんでいる。ぐいーんと伸ばされた頬はすごく柔らかそうで触り心地が良さそう…ってそうじゃなくて。いやいやいやカナタクんあんた何言っちゃってんの？仲良くなるんじゃないの？仲良くなるって俺に宣言した途端なんでそんな喧嘩腰になっちゃってんのよ。

これはもう駄目だ、こんなんじやカナタがどんなに友好的に接した所でハジメが心を開くわけがないと俺が諦め始めた時、ようやく我に返ったハジメは声を荒げた。

「っ！ーば、バカ言ってんじやねえよ！誰が嫉妬なんかっ」

「ああ？んだよ、自分でも気づいてなかったのかよ。ダチに嫉妬するガキプラス鈍感ばーやかてめえは」

こうして口論は始まった。

ぎゃーぎゃーとカナタとハジメの間には罵声やら怒声やら、とにかくもう子供に優しくない言葉ばかりが飛び交っていて、これはいけないといち早く気づいた俺は力ヲを連れてふたりから少し距離を取る。しばらく終わりそうにないその口論。仲良くして欲しいという俺の願いはカナタの一言によって一気に崩れてしまっていた。

そして、わけのわからない喧嘩をし始めた二人のほかに、わけのわからない子がひとり、俺の隣でくすくす笑っている。

どうしたのかと尋ねてみれば、ものすごい楽しそうな声が返ってきた。

「カナちゃんはすごいなーって思っ」

まるで今にも歌でも歌い出してしまいそうなほど機嫌はよかった。

「ハジメちゃんって単純でおバカさんだけど、あんな短時間で理解出来るような性格してないのよ。しかも一言も言葉交わしてないのに、見ただけでなんでハジメちゃんの機嫌が悪かったのか分かつちやうなんて」

どうやらコレは楽しそうではなく嬉しそうな声だったらしい。くすくすと笑うその表情は少し悪戯っ気があって、それでもすごい嬉し

そつだ。俺は俺でわけのわからないまま首を傾げる。一体今の光景を見て何が嬉しかったのか。俺にはどーもカナタが喧嘩を売ってそれをハジメがかったようにしか見えなかったのだが。そういえば嫉妬がどうか言っていたような気がする。ますます分からない。

「ふふっ、ハジメちゃんはねー」

「カヨ！！余計なこと言っくなよ！！？」

「…だつて。ごめんね、トモくん」

ハジメに口止めされてしまえばカヨもそう簡単に口を割る事は出来ないらしく、あまり悪いとは思っていないような表情で謝り、止めてきたハジメを見ては笑っていた。ちらりとハジメの方を見てみると、偶然にもばかりと目が合つてバツと目をそらされる。

そこまで分かりやすいと逆に傷つくんだが…。

確かに、カナタは凄いのかもしれない。俺でさえ、未だハジメの性格をつかめずにいるのだから、こんな短時間でハジメの性格…いや、性質と言った方が正しいのだろうか。それをよく理解している感じがする。仲が良さそうには決して見えないはずなのに、口喧嘩をしている二人を見ているとなんだか胸のあたりがもやもやとしてしまふ俺は変なのだろうか。やきもち焼くなんて珍しい。ハジメに？カナタに？どちらにしても、自分で仲良くして欲しいと言ったくせにいざ仲良くなると嫉妬するなんて都合良すぎるだろ、俺。

そろそろそんな自分に嫌気がさしてきて、自然と口からはため息が漏れてしまう。頬杖をついて、なんだか疲れてしまった目を閉じてみると不意に掌が温かい何かに包まれた。その感触の元を確かめるべく、そつと目を開けてみるとそこにあつたのは俺よりも小さな力ヨの手だ。日に焼けてもおかしくなくくらいに外で遊んでいるはずなのに、元の色素が薄いからなのか白魚のようにその手は白い。大人のようなすらりと細い指がついているわけでもなく、まだそれには幼さが残っていてぷくぷくとなんととも触り心地がいい。特にその

手を払うことも握り返す事もせずに放って置いてみると、心配そうな力ヨの表情が視界いっぱいに映り込んだ。

「大丈夫？ トモくん」

「あ、ああ。大丈夫」

どうやら俺は直接力ヨの顔を確認したわけではなく、その小さな手だけで力ヨだと決めつけてしまっていたようだ。手の主が力ヨだということとは当たっていたが、そりゃ手を置いてみたのに顔も上げず何も反応がなかったら心配くらいするよなあ、なんてまるで他人事かのように考えてみる。ぼうつとした目で力ヨを見つめているとその表情はだんだんと心配の色を増してゆくだけで、なんでもないと云わんばかりに俺はうつすら微笑んで見せた。ついでに頭を撫で、心配するなという意思を伝える。それでも、力ヨのそれが笑顔に変わる事はない。どうすればいいのかと少し困っていたところに、後ろから首にカナタの腕が回ってきた。どうしたのかと、話しはすんだのかとカナタに目を向けてみるとその表情も少し心配の色に染まっていた。

「帰るぞ」

「え、でも…」

「ハジメちゃんは俺と仲良くしたくないんだってさ。だから俺はここにいる意味はなくなったわけ」

「そっか…」

残念だな、と思ったのも事実。さっきは嫉妬してしまったけど、仲良くして欲しいと願っていた気持ちも本物だから。でもどこかほっとしている自分もどこか心の奥底に潜んでいるような気がした。きっと、ハジメとカナタは友達になったら仲良くなると思うから。そうなってしまえば、もしかしたら俺以上に、なんて不安も抱かざる

おえないわけで。

最低だな、俺。なんか恋人の浮気を心配してる女みてえだ。女々しくて目も当てらんない。

「じゃ、帰ろつか…」

「ちよっ！！なんでだよっ、帰るならそいつだけ帰ればいいだろ！！」

「ハジメ…」

「馬鹿か。トモは帰って俺の相手しなきゃなんねえんだよ。お前と遊ぶほど暇じゃねえよ」

「ふざけんなよ、てめえ…。んなのてめえが一人でなんとかすればいいことだろ！！トモヤを巻き込むなよっ」

「巻き込んでねえよ。こいつが望む事だ」

「はあ！？」

カナタ：そんな言い方したらハジメじゃなくても誰でも怒るって…。相変わらずな口調に呆れつつも、少し笑みを浮かべてしまう。カナタは昔から変わっていない。俺様だし、俺の事なんでもかんでも勝手に決めるし。そりゃ数日離れたくらいじゃ変わるわけないって分かっているけど、一日たりとも離れた事のなかった俺たちにしてみれば、その数日間でさえひどく長く感じてしまうものだ。昨夜は感極まって涙まで出る始末だし。

「な？トモ」

「へ？あ…ああ、うん。え？」

つい咄嗟に頷いてしまったが、なにがと尋ねる前にカナタは俺の腕を掴みさつさと引っ張っていつてしまう。困惑したまま引きずられながらもハジメを見てみると、俺以上に困惑した様子で呆然とハジメはそこに立っていた。

何がそこまでハジメを困惑させたのか。どうして傷ついたような顔を
してそこに立っているのか。
その時の俺は、ハジメの事も自分の事も、何も分かっていなかった
んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7989g/>

ぼくらのなつやすみ

2010年10月10日05時37分発行